

昭和9年(1934年)設立

公益社団法人 昭和経済会

昭和経済

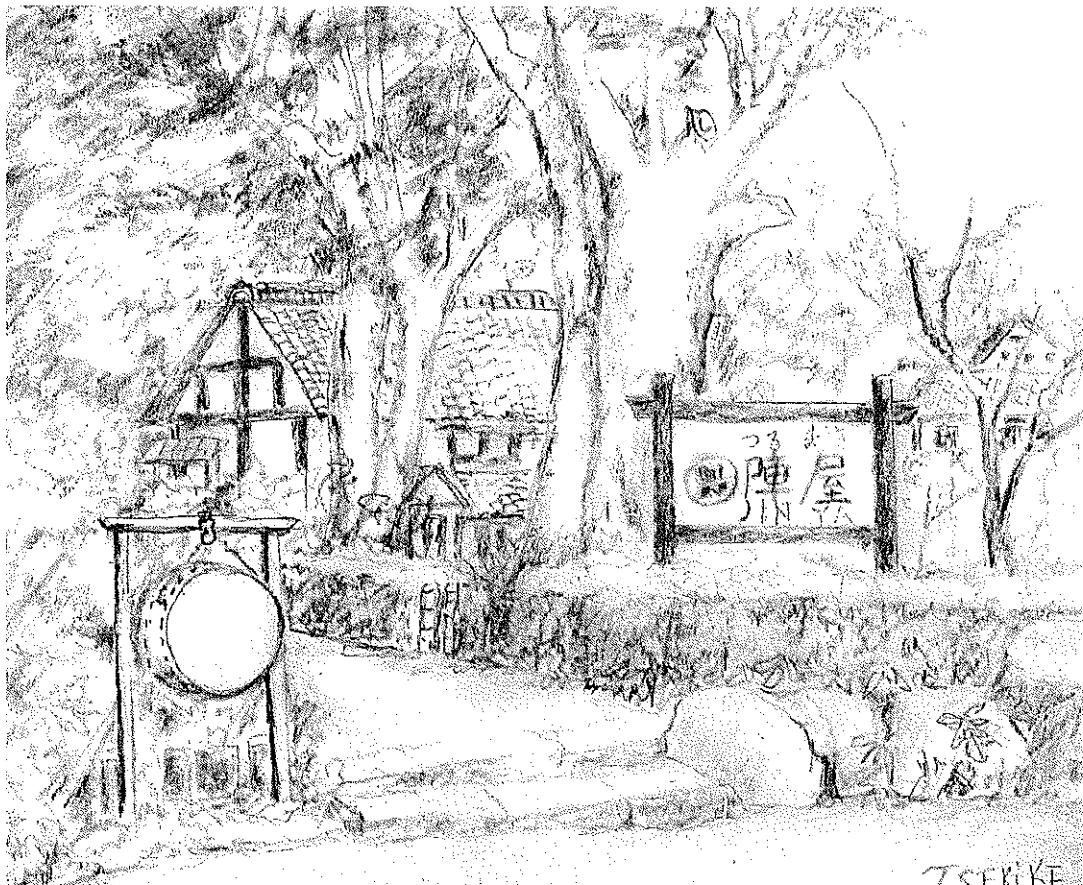
Manager Association of Japan

80周年記念
第65巻10号
26年9・10月号

国会図書館永久保存書

[時局論壇] 成長戦略の総括　革新へ大学の機能分化を
地域産業の活性化　低コスト拠点から脱却を
問われる政策決定　『多数者の専制』に危うさ

橋本 和仁
山崎 朗
石川 健治



TSEKKE

鶴巻温泉（陣屋）

人間社会は今日まで幾多の歴史的試練を経て、その存続を得てきました。

その間、私達は経済社会の生活の中で、自然科学への洞察は驚きを以て、文化科学への触発は閃きを以て発展に寄与してきました。科学技術の進歩と開発は人間の英知を以てこれに臨み、文化科学の啓発と振興は人間の情操を以て、限りなく高めてゆかねばなりません。

歴史のいかなる発展過程においても、常に人間の尊厳をうたいあげ、自由と平和が約束される豊かな人間社会の存続が、私達の目的であり実践であります。

昭和経済会は、伝統を重んじ、時代の変化に機敏に対処しつつ、この普遍的な理念のもとに、日常の企業経営と経済活動を通して、さらに公私経済の発展と推進に役立つ啓発、協力、親睦の団体として、その使命を果たしてまいります。

公益社団法人 昭和経済会

公益社団法人 昭和経済会の案内

(元財務省大臣官房所管)

創立と趣旨

会員制の企業家、經營者団体で我が国の「公私経済の発展助長と会員相互の連絡並びに親睦を図る」目的で、一九三四年(昭和九年)五月十五日創立され昭和十四年、大蔵省から社団法人の許可を受けました。

主な活動

- ① 会員相互の啓発、親睦、協力
- ② 内外の経済、政治、文化、學術の定期講演会
- ③ 政府、関係省庁への要望と提言
- ④ 専門委員の法律、稅務、經營相談
- ⑤ 海外派遣留学生奨学基金の活用
- ⑥ 月刊「昭和経済」の発行

九・十月号・目次



卷頭言 佐々木誠吾 (2)

定例講演会 アベノミクス

世界経済の潮流と日本経済の方向

成長戦略の総括
革新へ大学の機能分化を

熊谷 英生 (48)

橋本 和仁 (22)

わが回想記

堀江 忠男 (68)

地域産業の活性化

低コスト拠点から脱却を

山崎 朗 (28)

「母のひと言」

ランコ岩本 (72)

問われる政策決定
『多数者の専制』に危うさ

石川 健治 (34)

昭経俳壇

(76)

後記隨想

佐々木誠吾 (80)

安倍政権 第2章
『経済最優先』信じたい

表紙絵のことば

関根 常雄 (111)

映し出す昭和史の断面

特別賛助会員

(44)

(40)

(113)

卷頭言

佐々木誠吾

御嶽山が噴火した

秋晴れの爽快な日である。高い山は紅葉に色どる、絶好の秋山シーズンである。山登りの愛好家であれば誰だって山小屋を目指し、頂上を目指して行くだろう。稜線をつたわって天地の間を逍遙し、悠久の自然、展開する神の造形美を畏敬の念で賛美し堪能できるに違いない。そんな時に起きた山の噴火である。世の中には、理不尽なことが多いが、人間の手を以つてしては御しがたい事象も又、自然界の厳しい掟である。

ご信仰の山として親しまれている木曽の御嶽山が水蒸気爆発を起こして、頂上の南山腹に三つの火口を形成して噴火した。折から正氣象庁は注意を呼び掛けていたが、大した注意喚起にいたらなかつた。噴火をしてから正式に登山規制のレベル3に引き上げたのである。なぜもつと早い段階で警告を発しなか

登山中の多くの人たちに猛烈な火山性粉じんが襲つた。快晴の空に、突如巨大な白い噴煙がもくもくと恐竜のように、紅葉した山の稜線から登る光景は、大自然の極美に映つたが、それはたまたま居合わせたNHKの取材班がカメラに見事に美しく収めたものであつた。近くに遭遇した人にとつては、暗黒の粉じんと化した硫黄ガスで、恐怖の地獄図である。カメラの廻る先に逃げてくる登山客の姿があつた。カメラマンも、その後は恐怖から逃げるようにして下山したことだらう。

実は今月の十日ごろから、噴火を予兆する火山性微動を感じられていた矢先のことである。気象庁は注意を呼び掛けていたが、大した注意喚起にいたらなかつた。噴火をしてから正式に登山規制のレベル3に引き上げたのである。なぜもつと早い段階で警告を発しなか

つたのだろうか。噴火をして御嶽山の噴煙の状態や、登山客の戸惑う状態を知っている段階でも、レベル3なのである。しばらくの間、登山禁止を発表するくらいの決断があつてもいいのではないか。このあたりの感覚が、判然としない。怠慢である。まかり間違えば、物見高い登山者が、危険を承知で山を目指さないとも限らない。犠牲者を多くするのみである。現地からは、怪我人が出ているといい、火山灰で埋まつて身動きできない登山客三人がいるのを目撃したという。自衛隊の出動も要請されだし、警察や消防隊員の諸君たちも救出のため現地に向かい始めた。危険な硫黄ガスに襲われないよう、二次災害に逢わないように注意してもらいたい。

学校の地理学で習つたが、火山の噴火には常識的に見て二つのタイプがある。一つは

マグマ噴火である。もう一つは水蒸気噴火である。マグマ噴火は地中のマグマがいきなり吹き上げてくるものだが、水蒸気噴火は、マグマによって地下水が大規模に沸騰して、地表に吹き上げる場合である。登山者にとっては両方とも危険であるが、とりわけ水蒸気噴火は、周辺の広範囲にわたつて硫黄ガスを充満させるので、呼吸困難な状況を呈し、多くがその場で窒息死する確率が大である。心肺機能を停止させる原因ともなるので、特に注意を払う必要がある。救援に向かう人たちを襲う二次災害は、これに尽きるものである。とにかく危険地帯から離れて、一刻も早く下山すべきである。爆発による落下物からの直撃を受けないように山小屋に一時退避するか、下山にはロープを使って連帯を組み、火山爆発の噴煙から身を守るべきである。秋

晴れの下全山紅葉に輝く御嶽山の秋の絶景は、瞬時に破壊され、火山灰で真っ白におおわれてしまった。この日の登山客は長野県と、岐阜県からの合わせて四百人以上といわれているが、その登山道を今は、避難して危険から逃れようとする登山客の列が続いている。無事ふもとにたどり着くよう、天に向かつて祈るばかりである。

昔のこと、近所に住む狩谷さんの友達と連れ合つて数台の車を連ねて南アルプスの探検に向かつたことがある。連日快晴に恵まれてアルプスのふもとを連續して走破し、豪快に楽しんできた思い出がある。最終日近くには、穗高連峰をかなりの標高まで登りつめ、迂回して木曽の御嶽山のふもとの国民宿舎に泊まつたのである。翌日、早朝の暗いうちから宿を発つて、御嶽山の山頂を目指して同

行の仲間たちがのぼつていった。私はその夜、寝不足だったためで登頂に自信がなかつたゆえ断念して、車で一行の六人を登山道入り口まで運んで見送つたのである。あの時、無理をしてでも我慢して登つていくべきだつたと、その後も残念に思つてゐる。御嶽山が噴火したと聞いた日の夜、狩谷さんのお宅に電話をしたら、奥さんの明るい声が伝わつてきた。私はいきなり「木曽の御嶽山が噴火したよ。今日、登山中でなくて良かつたねえ」と、お互いに今日は難を免れたといわんばかりに言い合つたが、登山したのはもう二十年前のことなのである。しかし何だか今日の紅葉する秋の御嶽山を、みんなと元気に登つているような気がしたのである。噴出する火山ガスに巻き込まれないよう、登山客の人たちの無事を祈つてやまない。

九月二十七日

第二次安倍内閣の発足

第二次改造安倍内閣が発足する運びとなつた。組閣におあたり、新しく清新な顔ぶれと老年な閣僚の配置は、抜群である。水面下で選んできた人事は、電光石火、政治の空白を作らずに、陣容を固めることができた。内閣、党役員人事を見ても安倍さんの前進的な信念を表していて、爽快である。安倍さん自身、第一次内閣では、難問山積の中、それなりの成果を上げてくことができた。これは

国民の大多数が、安倍政権の運営に安定感を得、国策推進に協力してきたおかげであると思ふ。

今回の組閣では女性の登用も、多く概して政策実行内閣として評価したい。自民三役に

ついても、幹事長に清廉な谷垣禎一氏を起用してよかつた。元財務大臣、自民党総裁を務め総裁選に臨むも惜敗し、あるいは辞退した経過もあるが、人望厚く、政策通でもある。党運営の金庫番でもある実力的地位を得て、私心を持たず公正、良識を得た党運営に尽力される人である。党勢拡大に大いに尽力されるだろう。別に安倍政権を底らサポートし、党の信頼向上着実に進んでいくと思う。財務省の大蔵官房所管の社団法人だつたころは、当会が大変お世話になつたいきさつがある。

石破氏も重量感と信頼感があふれて地方

組織に絶大な信頼を築いてきたが、幹事長の続投の願望を断ち切つて、地方創生大臣に就任することになった。このポストは安倍政権の重要な課題を抱え込む職責である。安倍政権

の第三の成長戦略とも大きくかかわりを持つものである。地方再生は、東京一極集中化を廢し、これを成し遂げることは、日本の内需拡大をもたらす強力な武器となろう。地方のインフラ充実は、地方の経済力を作るための基本的な政策である。人口減少に歯止めをかけることにもなる。

焦眉の点は、安倍政権を取り巻く諸外国の状況である。首相みづから海外経済外交に積極的に取り組んでいる。この頃の活動であるが、安全保障の問題と、集団的自衛権の問題は、表裏一体であるものの、これからもいろいろと論議を尽くしていくことである。とりわけ、中国の海洋進出に焦点を置いた問題である。中国は、13億の人口をかかえ、色々問題をはらんでいることもあって、最近の国内政治に難題山積である。南沙諸島や、我が

国の尖閣諸島に対する領海侵犯事件などは、そのはけ口を求めたガス抜きの兆候すら感じて、こうした挑発行為に出てきているのであって、これが日本の危機意識を過剰に作り出している傾向がある。そのことによつて、日本の防衛増強に進む方向に、一部に右傾化を試みる兆候があることが心配である。いたずらに、国の資力、労力を浪費する愚策を避けることに留意する必要がある。あくまで、日本の、独自の国際政治に、関与する姿勢を明々白々に堅持して、国際的な軍事的紛争と行為に巻き込まれるような愚策は避けてもらいたいものである。

ここで今日、安倍政権の新しい第一歩のみを記したことを、心から喜び、スマートで英知に満ちた日本の独自の、積極的な平和外交を推進してもらいたいと念願し、同時に継

統的経済政策の遂行に邁進してもらいたい
と希望している。

九月二日

錦織選手の決勝進出

開催中のテニス全米オープン大会では、日本代表の錦織圭選手が、居並ぶ世界の強豪を破り、昨夜は準決勝に臨み、優勝候補のジョコビッチ選手に肉薄し、これに打ち勝つという壮挙に終わった。錦織選手の不屈の精神と、強靭な肉体を、限界にまでに發揮して臨んだ快挙である。その激闘を見た観衆の多くが、世紀の一戦にかたずをのんで見守り、感動を覚えていたのである。技とスピードと闘志をいかんなく発揮した力の源泉は、鍛え抜かれた強靭にして柔軟な肉体の、しからしめるゆ

えんである。感動のプレイは日本人のみでなく、全世界の人々にあたえられた。決勝は、三日後の日本時間で9日午前6時からだ。又早起きして、応援しなければならない。

テニスと云えば、昔から欧米にもたらされて愛好されてきたスポーツであり、東洋、とりわけ日本人には、特別な感じを以て一部の人たちに熱狂的な、ハイカラなスポーツとして扱われてきた。ゆえに華やかなスポーツ選手として世界に君臨するアスリートは欧米に限られてきたのである。ところが優れた才能を以て登場した日本人の錦織選手が躍如として登場し、世界の強豪を相手に善戦をし続けて上位に上り、頂上を極める寸前今まで辿りついたことは、想像もしなかつたことであり、破天荒な出来事なのである。準決勝で世界ランク一位のジョコビッチに勝利し、決

勝進出を決めた錦織選手のガツツポーズと会心の笑みに、渾身のエネルギーをもらつたつもりで、小生も思わずガツツポーズで打ち返したのである。

決勝戦の相手は、これまた錦織選手と同様、上位をめざし勢いに乗ってきた黒ひげのマリン・チリツチ選手で、気合的には油断ならない。クロアチア出身である。一九八センチの長身から打ち下ろすサーブは、錦織選手にとつては脅威である。いかにこれを打ちかえせるかに尽きるであろう。

九月七日

天変地異に過ぎた夏
今もこのビルが大きく揺れて、みんながみんな身構えた。私はたまたま机から離れて、

テーブルに置いたあつた書類に目を通して立っていたので、地震を伝えるわずかな振動を足元に感じていたので、地震かもしれないとみんなに知らせた。その三秒後あたりに、このビルがゆらゆら揺れ出して、その揺れがしばらく止まらなかつた。もしかしてこのまま揺れが止まらずに、ひよつとすると更に揺れが激しくなるのではないかと、不気味なくらいである。隣の部屋の若者が部屋のドアを開けて、青い顔をしてどうすべきか戸惑つてゐる。わがオフィスは部屋の空気の換気のために、日ごろからドアを半開きにし、一方で外の窓を開けたりしているので、こうした時には安全装置を日ごろ訓練的に行つているものと認識した。と云うのも地震や火災が激しいときには、ドアの開閉ができずに災難に会うことがあるからである。この時も揺れが

激しく感じてテレビのスイッチを入れたら、画面に地震発生の状況が素早く流されていった。関東地方にかなり大きく伝播しており、東京を中心に関東一円、震度4であつた。三〇秒ぐらい揺れていたであろうか。窓から銀座界隈を見たが、下の高速道路の街灯のポールが大きく揺れているのが地震の揺れの強さを示していた。ふと二年半前に起きた東北大地震の時の恐怖を思い出して、この揺れの三〇秒間は、正直のところ怖い感じがした。規模の測定を予想しえないので、自然現象の変化の巨大な動きは、人知の及ぶところではない。だからどんな力が加わって地表に襲いかかってくるか、想像を超えた恐ろしさがある。ようやく静まった揺れにほっとして、いざとなつたら逃げだそと身構えていたが、大事に至らず幸いであった。

今年ほど狂った気象に悩まされた日本列島はめつたにないだろう。一方で干ばつにあると思えば、九州、中国地方を襲つた集中豪雨は大きな自然災害となつて人々の生活を脅かしている。広島市郊外で発生したがけ崩れや山崩れの土砂災害は目を覆うべく、河川の渦流は民家を襲つて、死者七十三名に及んだ。悲惨である。二次災害発生の危険の中、連日連夜の救助活動に、警察隊、自衛隊、消防隊の諸君たちが、相変わらずの篠付く激しい雨の中、必死の活動を行つてくれている。一刻も早く救援活動に奏功し、現地の復興の日を祈りつつ、待ち望んでいる。

短歌同人誌・淵

短歌同人誌は、故、早稲田大学名誉教授、植田重雄先生が創刊されたものである。植田先生は哲学者で著名であり、かつ著名な歌人として大活躍され、また会津八一の愛弟子であり、会津八一研究の第一人者である。八一の和歌の調べは格調高く、品格を以て右に出るもののがいない。植田先生は、その八一の方葉調の調べをついでも、歌人としても第一人者である。植田先生亡きあと、小職は縁あってその淵を主宰して早や十年が過ぎてしまつた。その間、何かと趣向を凝らして淵を編集、発刊してきたが、切磋琢磨して、人生を己ながらに詠みあげてきた同人の存在を、いつも心にとめてきて喜びにつなげている。そのあとがきはえてして無題をほしいままにして当意即妙、自由に書いているが、これが

虚飾なく真実なので、面白がつて読んでくださつてくれていて。それほどにこの婆婆は捨てがたく意味深であり、面白いことがあつて悔れない面である。

そこで第一〇七号の同人誌を発行するため日本印刷の担当者、金沢青年が原稿整理のためオフィスに見えたのである。私があとがきを描いた原稿が必要だと言つてきた。まだ書いていないし内を描くか決まってないのでも、ふと話題的にひらめいたことがあつたので、その場で急ぎ書くことにして、悪いけど金沢君には十分ほど待つてもらい、その時間内に書くことにしたのが以下の文言である。何しろ先に述べたように短歌同人誌・淵は、日本の誇る会津八一の愛弟子、早稲田大学文學博士、植田重雄名譽教授が創刊したものである。今回も、即席即興なので現実味があり、

しかし眞面目に過ぎたかなと思つて書き終わつた。これを見て目を丸くしてゐた金沢君の顔が印象的であつた。

淵のあとがき

天変地異に荒れた夏が過ぎた。異常気象のもたらした灾害の爪痕は、全国各地にあり、

日々生々しく報道された。二次灾害の恐れの中、警察隊、消防隊、自衛隊の諸君の懸命の救助、援助活動が行なわれた。ボランティアの多くの人たちも参加した。広島市郊外の住宅地を襲つた豪雨と土砂災害で、72名の人たちの尊い命が奪われた。痛ましく、悲惨である。

一二ヨ現象で、地球規模の大きな海流異変もあつて、また、偏西風の蛇行が狂つて、各地の気象状況の秩序を崩している。水害と干ばつといった両極をはさんだ極端な現象である。結果、海産物や農産物にも多大な被害をもたらしている。

何事も秩序を崩されると、表に出てきた現象は複雑多岐にわたり、人々に直接、間接の被害を与えてくる。時には地球上の生物全体の生態系を崩し、生存の危機をももたらす。きらめく満点の空を仰ぐとき、真砂の星のきらめきに幻想される思いだが、天体上の無限のエネルギーの変容によるところもあると推測されるが、地球規模での考察となれば、原因は限定されてくる。要は地球温暖化がまず挙げられるが、これは微小の歴史的時間内に、人類の経済的生活が、飛躍的発展を遂げ

た結果である。その悪玉のCO₂の無鉄砲な排出に気が付いて、みんなが注意するようになつた。遅きに逸した感があるが、これはよい傾向である。

こんなことになると、思いついてこの場で書いたのも、日本印刷の営業担当の金沢君が颯爽と部屋に入ってきたからである。北京秋天のくまなき空を思わせるような今日の天気のすがすがしさに、環境の大切さを感じたゆえんである。排気ガスでむせるような街なかには暮らしたくない。せめて体に吸い込む空気だけは、酸素いっぱいの澄んだ空気であつてほしい。短歌同人誌・淵の原稿と一緒に、あとがきを書くように頼まれたので、一瞬の思いつきにこうしてペンを走らせているのである。しばらく待つてもらつていいところである。秩序の破壊は平和的生存の破壊に通じるもので、万事に当てはまる。

五七五七七の大和ことばのリズムに乗つて和歌を詠んではいると、万象を対象に当意即妙、うたを自然と詠み上げることができるので、これは秩序を重んじた形式によるところがあり、真理に近いものである。これこそは優れた古代人の知恵と感性の象徴である。淵に参加して自分の思いのたけを自由に歌い上げて発表し、権威ある誌上に残していくける幸いを喜びとして、毎日をより高尚に努めていきたいと念願している。

最近、日本人が世界で活躍する姿が躍如としている。そうした人たちの紅潮した場面は感動的である。昨夜、テニスの四大大会の全米オープンでわが日本人代表の錦織選手が肉迫して、優勝候補で世界ランク一位のジョコビツチ選手を破り決勝に進んだ。快挙であ

る。テニスと云えば、常に歐米のスポーツの牙城として東洋人を退けてきたきらいがあるが、錦織選手はこの堅牢不落の牙城をうあぶつて世界制覇を目指すことになった。その

不屈の精神と強靭な肉体を以て次の決勝戦、九日の大奮闘を祈るばかりである。約十五分

経過し、好青年の金沢君にこの執筆を終わるまで待つていただき、「あとがき」をめでたい内容で書くことができ感謝している。

金沢君は大リーグで活躍する上原投手にも似ているが、錦織選手にもそつくりなことに気が付いたので、ここに確信を以て申し添えることとした。明るい青年はどこに行つても水を切るように冴えている。

加えて日本印刷には長い間、昭和經濟会の月刊誌、昭和經濟の印刷をお願いしてくる。古き伝統と格調も以て、時代の潮流に流

されることなく理念と信念を堅持し、各位のご協力も得て発展してきたのである。その昭和經濟も金沢君が担当して、活躍していくくれる。金沢君に感謝をこめてともに祝う歌もここで詠んでみみたい。

我がうたの思ひを聞きてうなづきぬ金沢
君の高き知性よ

ほがらかに笑ふ青年の末永く栄えの道を強
くあゆまん

わが会の創立八十周年を記念して今宵の席
のうまし酒かな。

昭和なる偉名をしるす我が会の平和と自由
と繁栄の基礎

九月十日

引き出しの中

書類を整理していたら、コピー紙が丸まつて入っていた。広げてみるとこんな歌が書いてあった。八月十五日に詠んだ和歌であった。ちょうど疎開先の袋田駅にたどり着いて、煤けた水郡線に乗って父と兄二人ががんばつている水戸に帰る情景であった。めちやめちやになつた日本の国である。どうせ死ぬなら家族が一緒にそろつてゐるときのほうがないと、母の決断であった。帰ればきっと怒られるに決まつてゐる。連日のように空襲警報が鳴つてゐるさなかである。加えて、水戸は十日前の焼夷弾攻撃にさらされて、その時は運悪く、敵機が飛来して、今夜夜間空襲が行われるから、市民はすべからく避難するようになると予告するたくさんのビラがまかれたその夜のことだつた。八月一五日の時と同じ

ように、母と弟と私が思い余つて汽車に乗り、危険な水戸に行くところであつた。暑い日盛りで誰もいない閑散としたひなびた駅で、間もなくやつてくるかもしれない、それすら期待できない汽車を待つてゐたのである。その時に聞いた戦争終結の天皇のラジオ放送であつた。雜音がはげしく、よく聞き取れないものであつたが、聞いたこともない天皇陛下の声だつたのである。駅長さんが一人改札口に立つていて、びっくりした顔をして、やがてかすかに顔がほころびた様な気がした。しばらくして母が、戦争が終わつて空襲が来ない時が來たようだとつぶやいた。一抹の不安と、安どの気持ちが、子供心にあつた。一時間ぐらい待つただろうか、汽車が久慈川の鉄橋を渡つてきたのを確かに見つけた。汽笛を鳴らしてわたつてくるではないか。五両連結

の貨物列車であつた。駅長さんは入つてくる

汽車を止めてくれた。戦争が終わつて入つて
きた平和の使者である。貨車であつても、希

望を満載した貨車であつた。それに乗せても
らつて水戸に向かつていくときの気持ちは、

背中に大きな羽が生えたような気分で、大空
に羽ばたいていくのと同じであつた。

了し世にそ出でけり

この際は愉快に文芸春秋の昭和天皇史を読
まんと思ふ

敗残の兵続々と帰りきぬ瘦身の身に何を語
らん

思へかし三百万のしかばねの上を這ひずる
この國の民

長編の歴史小説となりしかも昭和天皇の史
観世に出づ

幼な身に体験したる戦前と戦後のみだる昭
和史なれば

かりそめのこの世の身をも犠牲にしなほ十
字架にかかるキリスト

九月十九日

和実録

すめらぎの生きざましげく昭和史の編さん

落ちる姿よ

激動の昭和のみ代の天皇の苦悩をつづる昭

天皇

おぞましき馬鹿な戦争指導者の奈落の底に

天皇の戦争終結の放送にひまわりの咲く

袋田駅頭

太平洋戦争開始の宣言と終結宣言をなせる

天皇

おぞましき馬鹿な戦争指導者の奈落の底に

始まつた国会論戦

秋の知らせ

夏の暑さに打ちしがれていた草花が勢いを増して生き返つてきている。見事なのは、庭のレンガ積みの壙に沿つて妻が植えたベニニアだ。夏の暑い日照りの時は、懸命に水をやつて保水を心掛けていても、この前までの猛暑には辟易していたのだろう。それがここにきて毬のように枝を膨らまし、見事に生き生きとした様子に生き返つている。枝の先に可憐な花をいっぱい咲かせて、道行く人たちの目を楽しませている。このところのすっかり秋めいた涼しさが、花にとつて気に入つた絶好の好条件なのかもしれない。ベニニアの花はそれぞれ赤、白、ピンクといった色だが、それを交互に一列に植えてあるので、道行く人は歩きながら鑑賞できて乙な演出を見せている。ベニニアの咲きっぷりも、実に華やかな風情である。普段植えているものだ

が、こんなにきれいに咲いているのを見たのは珍しい。そろそろ菊が咲き始めることがある。菊の花は大輪で豪華な必要はない。小菊というほどに、小さな花をいっぱいいつけてるのが可愛いし、好ましい。特に赤の小菊がいい。野菊の墓という小説があつたが、少年少女の淡い恋物語を描くほどに、小菊の印象は純粹で馥郁としたものがある。今年は庭の隅々に植えたので、ほのかに漂う高貴な香りもそうだし、盛りのころの花が今から楽しみである。近寄つてみると、菊の葉の匂いが風に触れて匂つてくる。注意してみると、すでに小さなつぼみが葉の先にたくさんついているのが確かめられた。今年は例年より庭の手入れを早く済ませたので、あとの細かな手入れと、ささやかな仕事は、小生の趣味としてやつている。農作業とは別に菜園と、園芸の専門家の三井さんが見えて、いつの間にかすつきりした庭の様子に驚いていた。

衆院予算委員会

国会が始まって本会議での安倍さんの施

政方針演説が終わって、各党の代表者質問もおわって、昨日三日から衆院の予算委員会での本格的な論戦が始まった。アベノミクスの実効的な場面と課題が、野党追求のもくろむところだが、押しなべていえることは、どう見ても野党の論旨が散漫である。政治家として普段政治活動において訓練されていれば、政府に對して激しい突っ込みができるのだが、そうした訓練と実践がなされていないので、迫力を以て攻撃をすることができないのである。もっと経済活動の現場に接して、状況を肌身に感じていれば、現場主義の論陣を張つて出ればいいのだが、普段の足による活動を怠つてるので、机上の空論に上滑りしてしまう傾向がある。そうすると論議に現実の課題が、実感として迫つてこないのである。庶民の、民衆の声を反映した議論でないと、

真の国會議論につながつてこない。残念である。

質問に立つ野党が点々ばらばらに解体された後だけに、しかも野党共闘の足並みがそろつていらない状況だから、論議に焦点ボケはいがめない。凋落の身の民主党だが、今回の国会では政権担当時代をほうふつさせるようなベテラン議員が復員して、自民党と対峙する様子がうかがえるが、議論に進歩性、現実性がないと、これも悲しい口笛だけにとどまってしまうだろう。地についた激論を交わして、巨大政党に躍進した自民党の、驕りと惰性を食い止めてもらいたい。民主党に政権担当を託した国民党だが、運営能力の欠如ははははだしく、自民党との実力の差を歴然たるものにした。こうした過去の印象をねぐらには相当の努力が必要である。今の野党全體にそのことがいえる。その結果、自民党の実質的一党支配の国会運営を許すことは、国民

にとつてもいいことではない。そのための努力を少しでも達成することは、民主党にとつて上出来といわねばなるまい。国会論戦を通じて正しい論議を尽くすことを期待したい。

海江田代表のもと結束する意気込みの野田元首相をはじめ枝野、岡田、玄葉、安住、前原といった懐かしい顔ぶれが出てにぎやかな感じの国会になつて、久しぶりに活気を呈してきた。彼らにとつては、少なくとも日常の勉強の結果を強調して己を演出し、国民の注目を呼び寄せる絶好の舞台である。民主党が、忘却の彼方に持つていかれても、存在意義を否定されても、あまりにもさびしい気がしてならない。政権担当の能力さえあれば、内外の華やかな舞台で、政治家として国民のために働くことができるのに、政治家としての志を果すことができるのに、おこり高ぶつた結果があの始末である。特にお坊ちやまの鳩山に至つては、はしやぎすぎて、あほ丸出

しであつた。あれが出てくるとアレルギー反応が出てきて、何とかしてくれと思つたほどである。あんなあほを党首に出したりする民主党議員の良識の欠如は歴然である。あの程度のセンスしか持ちえないとすれば、国の大政事な政や、国際社会に出て活躍できるはずがない。気持ちを入れ替えて再出発するという民主党的センスと力量を早く認知してやりたいと思うのだが、果たしてこうした声にこたえられるか、国会の論戦を見て私は判断したいと思っている。あえて奮起を求めるたいところである。

問題の重要な課題は山積である。集団的自衛権のことについても、まだまだ論議の余地はある。先送りされていく感じだが、いつの間にか権力者の都合のいいような勝手な状況を作り出されていても困る。憲法とのかかわりを以て、戦争放棄を明示している第九条と

は今後どうなつていくのか、解釈の拡大を以て自衛権発動が実質、自衛隊の海外派兵にながつっていくのかを、もつと明確に国民の前に示してほしいものである。

経済問題をとつてもアベノミクスは今正念場に差し掛かつて、難しいかじ取りを迫られている。消費税の増税後のマーケットは、様々な局面で微妙な数値の差をもたらしている。円安の急激な進行で、企業間競争の格差の拡大が続いている。輸出企業にとつては追い風となつていて、輸入物価の上昇は、逆の作用であり、公暁間の格差をますます加速させていて、消費者物価も輸入品目の価格上昇で、家計に対するマイナス影響になつてきている。地方の経済はまだまだ景気を回復していないし、逆に労働人口の人手不足と、資材高騰で、建設、土木事業は、現場着手ができずに倒産する企業が続出している。

一方、日銀による市場への大量資金放出は、景気回復の劇的効果があつて、株価の上昇は投資家の所得上昇となつて、その分、消費上昇につながつて好循環をもたらしているが、これとてそろそろ限界的である。日銀が大量の資金供給してきた額は毎月7兆円であり、すでに120兆円にも達している。じやぶじやぶの資金が市場に出回っているが、いずれ金額の縮小、停止、回収といつた出口を模索することにもなる。アメリカの強い経済回復もあって、本来ならば輸出増大につながつて国内経済の押し上げにかかるつていてもいいはずであるが、それが思うような結果に至つていらない。このジレンマの克服が課題である。日銀が金融緩和を静観し、出口を模索していくような戦略になつた時の反動が、今のままの経済状況からした場合に、その成り行きが不安視されている。

地方の友人の事業の厳しさ、都会の中小企

業の資金繰りの厳しさなどを見ると、アベノミクスの好悪二面の局面が顕著になつてきている。安倍さんも大変な精勤の毎日だが、有能な閣僚を駆使して、国難に挑んでいくてもらいたい。周辺諸国の波風も強まつてきて、国土防衛をしつかりとしてもらい、我々が安心して企業経営に従事していくけるような環境つくりに英知を絞つてもらいたい。たとえば地方創生に大物の石破さんを担当大臣に起用したが、鳴り物入りで始まつた先刻の内閣改造で、新しいエネルギーを發揮して、まずは国内経済の回復維持と最優先課題とし、奮起を促したいところである。又女性の社会進出を強力的に推進していくことも、安倍政権の目玉的重要政策である。公務員の三割を女性職員として新規に採用するよう各省庁に実行するよう指示を出してくる。各役所に女性職員を配置することは、職場にも華やかさとソフトさが加わって、効率

も向上するのではないだろうか。女性の本来的傾向が職場として必ずしも全ていいわけではないので、現場で職務の規律や規則の軌道修正を図つたりすることは、改善の余地を与えることになって好ましいと思う。

それと地震国日本である。3・11の東北大地震の影響で、日本列島を取り巻くブレートに大きな変化が起きており、その影響はまだ予断を許さないものがある。御嶽山の噴火は火山国日本の特徴と宿命を思い起こさせたが、原発再稼働の川内原発をきっかけに議論は決着したわけではない。九州電力では、太陽光発電の電力買い取りの申し込みを中止したということである。供給過多で、太陽光発電を準備した生産事業者に衝撃が走つていて。電力事情は大きく変わってきて、再生可能エネルギーの供給力は大きな発電余力を生み出しつつある。電力事情は、新規の発電技術の開発と相まって、将来にわたつ

て、供給市場にインパクトを与えていくだろう。電力の従来的発送電の分離を早く促して、こうした状況に対応すべきである。よつて原発再稼働を待つ原発施設の基地にとつては、また新しい問題を突き付けられたのではないか。

有意義な国会論議を尽くし、上滑りな議論に終わることのないよう、尻切れトンボにならないよう、時間と経費の無駄使いにならないよう努力奮闘を野党諸君にも進言したいところである。十月三日

御嶽山噴火の悲劇

御嶽山噴火に遭遇した登山者の犠牲者があとからあとから確認されて、痛ましい数に上つてしまつた。この様子だと、犠牲者がまだ増える可能性すら否定できない状況である。山の遭難事故としては史上最悪の状況に

なつてしまつた。火山の噴火は予知が難しいと関係者は言い切るが、そうとは言い切れない。火山活動を検知する計器を各所に備えているが、今回にしても、通常以上の微震を早くから検知していたはずで、この取り扱いを間違つていたのではないだろうか。現場は、その後に襲つた巨大台風一八号の影響もあって、大雨によつて遭難現場の捜索は難航を極めている。降り積もつた火山灰はどうどろの中、ところによつて腰までつかるほどの泥状となり、自衛隊、警察隊、消防隊の一行の捜索を阻んでいる。心配なのは「二次災害だ」死者の七割が山頂に集中していることも分かつた。十月五日現在、わかつた死者の数が五十四人となつた。十名が依然として行方不明者である。

十月五日

〔時局論壇〕

成長戦略の総括
革新へ大学の機能分化を

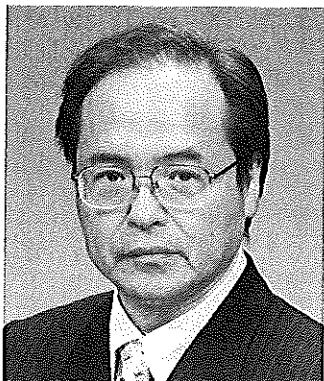
東京大学教授

橋本 和仁

政府は6月、日本再興戦略（成長戦略）の改定版を閣議決定した。報道では法人税、農業改革、雇用問題などが目に付き、イノベーション（革新）は後塵を拝したかのごとき印象があるかもしれない。しかし、実際は重点施策の1つとして明確に位直づけられており、重要度は昨年からいささかも後退していない。

各国は今、国家戦略として科学技術を基礎とする革新を誘発するための「ナショナルシステム」の改革にしのぎを削っている。安倍晋三首相も6月の総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）で「本年は世界で最もイノベーションに適した国を実現すべくイノベーションシステム改革のための具体的な取り組みを加速させたい」と表明した。

現役の化学研究者である筆者は、研究現場の情報を的確に政策に反映させることを使命に、産業競争力会議とCSTIの議員とし



てシステムの構築に直接関わっている。本稿では政府の取り組みと課題を解説したい。

* * * *

昨年の成長戦略でのイノベーション関連の最重要課題は、内閣府に置かれた総合科学技術会議（現CSTI）の司令塔機能の強化であった。各省庁がバラバラに進めがちな研究開発施策をCSTIが俯瞰（ふかん）し、各省庁の壁を越えて横串を刺すことで効率や効果を高める目的である。

具体的には①各省庁の概算要求の検討段階からCSTIが主導し、政府全体の科学技術予算の配分を重点化する予算戦略会議の設置②CSTI自らが予算配分権を持ち、省庁横断で取り組む戦略的イノベーション創造プログラムの創設③実現すれば産業や社会に大変革をもたらすハイリスク・ハイインパクトな革新的研究開発推進プログラムの創設——を柱に進めてきた。

予算戦略会議は昨年、各省庁の局長級が参加して4回にわたり開いたほか、2015年度の予算編成に向けても本格始動した。②と③も各プロジェクトの責任者の選定が終了し、今まさにCSTI主導のもとで府省横断型の研究開発が始まろうとしている。

* * * *

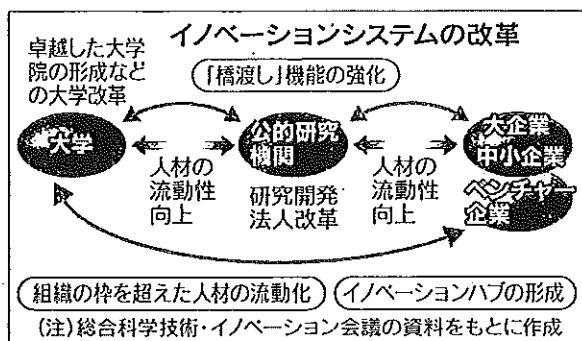
今年の成長戦略の改訂版と科学技術イノベーション総合戦略では、基礎研究の成果を革新につなげるためのシステム作りが最重要課題となっている。革新の芽となる優れた基礎研究成果や人材を生み出す役割は主に大学に代表される学界に期待されている。一方で新たな製品やサービスを社会に提供し、革新を実現するのは産業界の役割である。

产学連携が推奨されて久しいが、残念ながら我が国では現在、大学の知が産業界に移転・括用され社会経済に貢献するためのシステムが、うまく機能しているとはいがたい。

わが国が誇る高い基礎研究力の成果である技術シーズ（種）が、日の目をみずく地中に埋まつたままなのである。基礎研究成果を産業界へ展開（橋渡し）するシステムの構築が喫緊の課題となる。

今回、産業技術総合研究所や理化学研究所などの公的研究所の括用が、橋渡し手段の中核に位置づけられることになった。中心となる政策は、公的機関が大学および産業界とのオーバーラップ（相互乗り入れ）を格段に高め、研究成果や人材の橋渡しをするというものである。

大学との関係では、優れた研究者が大学と公的機関の両方に等しく身分を持つ「クロスマッチメント制度」



導入・括用が提案された。それを可能にするため、本年度中に保険・年金や退職金をどう扱うかといった環境整備をすることとされている。

産業界との関係では、公的機

関の改革が決まった。研究成果の実用化と普及を加速するため、公的機関の研究テーマは産業界の求めるニーズを把握したうえで設定する。評価基準では論文、特許などの研究成果だけでなく、産業界からの資金獲得や研究者参画なども重視する。

こうした改革で、大学などで得られた基礎研究成果のうち社会的価値につながる可能性のあるものは、環境が格段に優れている公的機関で研究が

加速される。専門的な知見を基にした出口（企業側の需要）からの検討も加わえられるので、より効果的、効率的な産業移転が期待できる。

人材育成・研究環境面でも多くの利点が期待できる。大学院生は単に基盤研究にとどまらず、発展的な研究に関われる。産業界の研究者も、公的機関での研究成果を基に学位取得の道が開ける。研究者の密度の少ない公的機関も活性化する。

公的機関を中心に产学が連携を強める姿は、ドイツに先例を見ることができる。東西統一後の厳しい財政下で大学と公的機関の改革を同時に進めた結果、有力な研究者は大学と公的機関の職を兼ね、研究が社会的な価値を生み出しやすい体制が整った。

* * * *

前述のように施策の方向性が明確になつたなかで、今後、本格的に取り組むべき課題

はイノベーションの視点からの大学・大学院改革であろう。これこそがイノベーションシステム改革の本丸である。

これまでのわが国の大学政策は、いわゆる護送船団方式と呼ばれるような全国一律の適用が中心であつた。グローバル競争が激しさを増すなかで、各大学が強みや特色を最大限に生かした改革をし、持続的な競争力を持つ大学へ変容していくことの必要性は論をまたない。

文部科学省も昨年11月に発表した国立大学改革プランで、今後の各大学の機能強化の方向性について①世界最高の教育研究の展開拠点②全国的な教育研究拠点③地域活性化の中核的拠点——3つの分類を示している。このような機能別に分類した改革は極めて正しい方向であり、その速やかな実行が望まれる。

その際、注意すべきは、この分類は決して

大学のランキングではなく、それぞれの役割は同じだけの大きな価値を持ち、それらを分担するということである。各大学が自らの判断で手を挙げ、何を目指すのかの評価軸を明確にすることが望ましい。そのうえで国が各大学を評価する際にも、機能ごとの特性を基に指標を確立すべきであろう。すなわち、
①は海外のトップ大学としのぎを削るのであるから当然、次元の異なるガバナンス（統治）改革が必須であろうし、評価も世界トップクラスの大学との比較でなされることになる。

同時に大幅な規制緩和により、トップの研究者、国内外の最優秀な若者、企業などの人材が世界の先頭を走る分野や異なる領域を融合した分野で思い切った挑戦をする「卓越大学院」の形成といった抜本的な機能強化を進め、優れた革新的の芽を出しやすくする環境を与えるべきである。

②は長年の蓄積で形成した各大学の強みを基礎に、その強い分野で教育研究の全国のネットワークハブ（中核）を目指すべきであり、その視点からの評価が必要である。

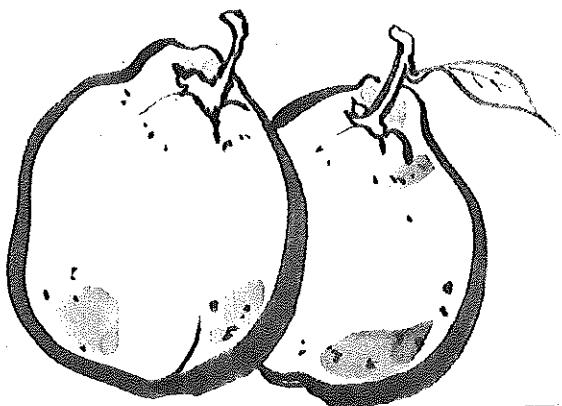
③は地域の未来社会に対する責任を持つ教育研究拠点であるから、地域の中核的存在として未来を構想し、人材を輩出する拠点機能に特化することが重要である。評価も、いかに地域社会とともに付加価値を創出したかが重要視されるべきであろう。内閣は人口減少対策の要として「地方創生」に取り組んでおり、国策としても重要である。

公的研究機関をプラットフォームとして、機構別に強化された大学が、大企業はもとより中小・ベンチャー企業と、連携を強める。さらに、そのプラットフォームが国際的なイノベーションシステムのハブとして機能し、知識、人材の大きな国際循環システムに入る。これが安倍政権の目指すべき「世界で最もイ

ノベーションに適した国」のナショナルシステムであろう。

東京大理学博士。専門は物理化学

木口一
和子
橘



作品 関根常雄

〔時局論壇〕

地域産業の活性化

低コスト拠点から脱却を

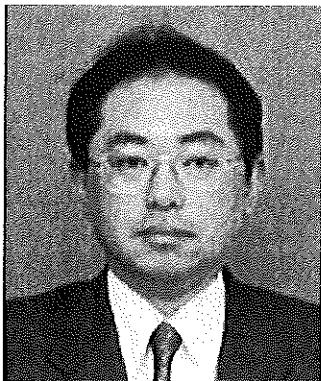
中央大学教授

山崎
朗

民間の日本創成会議は5月、少子化や都市への人口移動で、地方を中心市町村の半数が「消滅可能性がある」との試算を発表した。それを受けて安倍晋三政権は、地方再生を重要課題に打ち出した。地方再生には地域産業の活性化が不可欠である。

* * * *

1960年代の新産業都市、70年代の工業再配置、80年代のテクノポリスなどの工場分散政策の効果もあり、工場は地方圏に分散した。交通インフラの整備、地価・賃金の安さなど、地方立地の優位性は今後も揺るがないであろう。しかし、全国を対象として同種産業を同時期に立地させる政策は、地方産業の同質化と激しい誘致競争という敵対関係をもたらした。また、系列取引に縛られ、地元企業間の情報交換や取引も低調であつた。



90年代以降はバブル崩壊に加え、アジア

の製造業の勃興により、日本の製造業は長期にわたる大規模なリストラを迫られた。90年から2012年にかけて、日本の工場数は43万から21万へと半減した。

工業統計表の付加価値は、91年の125兆円をピークとして、12年には88兆円にまで低下した。工場労働者に支払われた現金給与総額も92年の46兆円から12年の32兆円に3割減少している。日本の製造業の国際競争力や付加価値生産力が低下したままでは、地域経済は悟性化しない。

地方への工場分散だけでは、地方産業の自律的な発展にはつながらず、労働集約型の工場はアジアに移転された。これからは先進国型の産業地域として、自ら付加価値を高めなければならない。生産工程の効率化によつて低コスト拠点となるのではなく、新製品・新技術の開発や新産業創出へ、方向を大転換しなければならない。

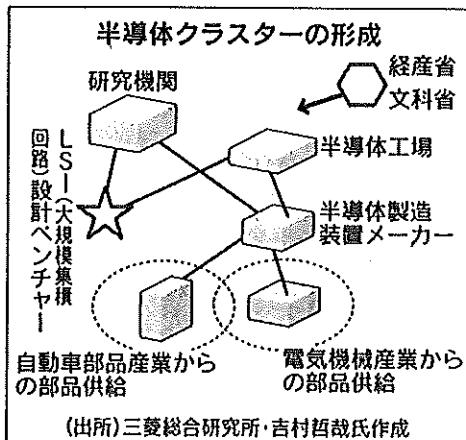
なければならぬ。

地方の生き残る道は産業クラスター戦略にある。地域の中核企業や大学・研究機関が協力して高い付加価値を生み出す戦略である。01年度に始まつた経済産業省の産業クラスター計画は、科学技術振興機構（JST）の地域再生人材養成プログラム、文部科学省の知的クラスター創成事業などと連携して、革新的な産業クラスター形成を目指した。

特許申請件数が少ないなどの批判もあるが、現時点で個々のクラスター計画の成果を正当に評価することは難しい。ただ、産業クラスターという概念が浸透したこと、「北陸3県繊維クラスター」や「アジアNo.1航空宇宙産業クラスター形成特区」（愛知、岐阜、三重県）のような、地域の特性を踏まえたクラスター戦略を誘発したことは間違いない。

* * *

今後、地方で期待される産業の第1は、エネルギー関連産業である。地方は太陽光、バイオマス、水力、地熱、潮力、風力による発電事業の「場」の提供にとどまらず、発電装置や開運機器の開発・生産、実証実験、装置の保守点検サービスへ展開することが可能だ。



これまで離島での産業開発は難しかったが、沖縄県の久米島、長崎県の五島列島などの5つの離島で海洋再生エネルギーに関する実証実験が行われる。

九州シリコンクラスター計画は、半導体の製造だけにとどまらず、半導体の設計、デザイン、開発およびシリコンウエハーや半導体製造装置といった開運支援産業の厚みを増すことを目的としてきた。近年、半導体製造の技術は、太陽光発電開運産業に応用されるようになってきた。九州の13年度の太陽電池モジュールの生産量は前年比59%増えている。

産業ガス企業の独りindeは、日本国内で岩谷産業と共同して水素充填システムの開発を検討しており、水素産業クラスターが誕生する可能性も高まってきた。ドイツでは07年ごろから、再生可能エネルギーについてのクラスター政策が実施されており、とくに旧

東ドイツ地域活性化の切り札とされている。期待される第2の産業は、医療機器・医薬品である。日本の国内市場は米国に次いで世界2位で、高齢化で需要拡大が見込まれている。にもかかわらず、医療機器・医薬品の貿易赤字は拡大している。

遅きに失した感もあるが、政府は7月、「健康・医療戦略」を閣議決定し、医療機器の輸出額を11年度の2倍にする目標を設定した。地方圏でも、これまで培ってきた技術を医療機器の開発・生産へ転用する段階に入つた。

医療機器の開発・製造には業界特有の参入障壁がある。それでも福島県のように業界事情に詳しい自治体職員や、福島県立医科大学、日本大学工学部（郡山市）の協力により、元企業が相次ぎ参入する地域も出始めた。福島県の医療機器生産額は、04年の604億円（全国9位）から12年の1089億円（全

国4位）に増加している。オリンパスは3年後をめどにロボットアームを備えた内視鏡を福島県で生産する予定である。

新薬の開発は主として大都市圏になろうが、地方圏では機能性食品、医薬品の製造や漢方薬の栽培・製造・開発に期待がかかる。漢方薬の原料の約8割は中国からの輸入に頼っている。東京生薬協会は新潟で、ツムラ、武田薬品工業は北海道で原料の栽培を拡大する方針である。

医療分野の产学連携は、工学部だけでは対応できない。医学部、薬学部、歯学部、農学部を含めた総合的な产学連携が求められている。

クラスター化とは6次産業化である。農作物→加工→販売といった1次→2次→3次という連鎖だけでなく、病院→製薬会社→農家（3次→2次→1次）といった価値創造の連鎖を実現すべきである。

産業クラスターでは大学の役割が重要である。浜松市では光産業クラスターの中核となる光産業創成大学院大学が設立されている。地方では、大学の研究内容と地域産業の特性が適合せず、うまく産学連携できないこともあつた。地方の大学は、合併して規模を拡大し、新しい技術に対応した学部や研究科を設立することも必要となる。

また地域の産業集積の実態を十分調査せず、いきなり「〇〇クラスター」といつたビジョンが打ち出されることも少なくない。九州の産業クラスターの評価が高いのは、九州経済調査協会という地域のシンクタンクが産業調査とビジョン作成を担つてているからだ。地域のシンクタンク機能を高めることも大切である。

* * *

地方圏に製造業企業の本社や研究開発部門を誘致することも検討課題である。こうした部門は地方の付加価値配分比率を高めることになる。トヨタは06年に本社機能の一部を東京から名古屋に移転させている。北陸新幹線の開業に伴い、YKKと建材子会社YKKAPは、本社機能と研究開発機能の一部を富山県の黒部宇奈月温泉駅周辺に移転させる計画を発表した。ソニーもリチウムイオン電池の設計・開発機能を福島県の郡山事業所に集約する予定である。

12年の工場立地動向調査によると、立地地点選定理由の1位は「本社・他の自社工場との近接性」であつた。首都圏の自然災害の危険性、賃料・給与水準の高さ、中堅企業での優秀な人材確保の難しさもあり、大規模な最新鋭の工場のある地方圏に本社機能を移転させる可能性は高まつていてと考えるこ

実現にはまず、自治体が独自に上乗せして
いる法人事業税と法人住民税を引き下げる
必要がある。企業にとって経済的メリットは
小さいかもしだれか、自治体の本気度を示
すことになる。本社・研究開発機能を持つ製
造子会社は、地方の産業クラスターにおける
アンカー企業の役割を果たすようになるで
ある。

やまさき・あきら 57年生まれ。九州大
博士。専門は経済地理学、産業政策論

山
崎
朗



作品 関根常雄

〔時局論壇〕

問われる政策決定

『多数者の専制』に危うさ

東京大学教授

石川 健治



近ごろ急に、立憲主義について一般向けに説明してほしい、という注文を頻繁に受けるようになった。立憲主義という言葉が浮上してきたのは、それだけ現政権の反立憲主義的性格が際立っているからにほかならない。尋ねられれば、やむなく後発の近代国家として國際社会に乗り出した日本特有の歴史的文章を指摘するとともに、それに沿った説明を提供することになる。しかし実は、それほどたやすい話ではない。

そこでいう憲法 (constitution) は、政治社会の構造 (constitution) そのものにかかわるが、そもそも政治社会の形が、歴史的な経緯に応じて多様だからである。

* * * *

たとえば憲法学者、美濃部達吉も、一口に立憲政体といつても、実際にはスイス型「直接民政主義の立憲政体」、米国型「権力分立主義の立憲政体」、主流をなす「議院主義の

立憲政体」、ドイツ型「官僚主義の立憲政体」があることを指摘していた（1921年「日本憲法第一巻」）。

そのうえで最大公約数としての立憲主義を「国民自治」（国民的議会と国民的政府）と「自由主義」（権利保障と権力分立）といふ座標軸に沿つて説明しようと試みた。時々の権力者が専制主義化しないよう「その暴走を防ぐのにふさわしい仕組み」を憲法に組み込み、「憲法に準拠した政治」を内在化させたのが立憲政体だというわけである。

ただし、美濃部における立憲主義は、国家主権と表裏一体の関係にある。

ここで主権とは、絶対者の形容であり、あらゆる主権論は絶対的な支配者を想定している。君主主権とは、絶対王政（絶対君主政）を裏返した表現である。國民主権も絶対民主政の意であり、多數決主義を探る場合、これは「多數者の専制」に等しい。

美濃部はそれを踏まえ、憲法は「國家法人」の定款にほかならないと考えた。「定款」は憲法に準拠した権限行使する「機関」も、憲法の定めによる。機関はそれぞれに國家全体を表現するが、個々の機関どうしが対立した場合、定款に定められた「最高機関」の意

これに対して、中央集権的な国家の形成と近代化をめざす明治国家にとって、国家の主権性の樹立こそが、第一課題であつた。

けれども、これは国家法を自在に破る資格が、主権者たる国家以外の、あらゆる存在から剥奪されることをも意味した。そこから反転し、立憲主義の思考回路を樹立するのが「國家法人税」と呼ばれる法学的な国家論である。

* * * *

立憲主義再活性化を

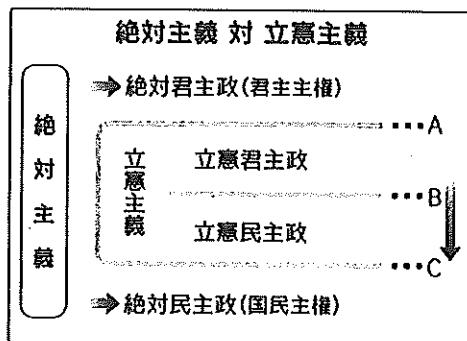
暴走を防ぐ仕組みにも光

志が国家全体の意思とみなされる。帝国憲法が定める最高機関は天皇以外ではあり得ない（天皇機関説）。

そうである以上、君主であれ国民であれ、國家法を自在に破れる主権者の資格をもたない。他方、憲法に準拠しない実力行使は、暴力団と同様の単なる裸の暴力であつて正常化されない。ならば、

国家法人の「機関」の地位に納まり、憲法という国家法人の定款に準拠した権限を行使しようということになる。かくして、すべての政治勢力が憲法の中に吸い込まれ、立憲主義が実現することになる。

それは、もともと絶対君主政にも絶対民主政に



も敵対的な立場であったが、明治末年段階での争点は、バタ臭い西欧風絶対君主としての天皇像をもち込もうとする、天皇主権との対抗であった。「絶対君主政」対「立憲君主政」という争点（図のA）において美濃部説は天皇主権説との対抗上、相対的に民主化のベクトル（図の下向き）をもち大正デモクラシーを演出した。

ところが戦後の憲法制定時は、争点が図のAからBに移動する。美濃部説では、立憲君主政であろうがどちらでもよく、じじつ美濃部は、大正期に時計の針を戻すだけで十分と、帝国憲法の改正不要説を強調した。戦中戦後を通じて一切まげることがなかつたの

は見事であつたが、時流に投じることのない
その頑固さが、結果的にはG H Q（連合国軍
総司令部）の介入を招くことになった。

そして明治憲法の改正手続きを借りながら
ら、実際には全く新しく制定されたのが、日
本国憲法である。この憲法を理解するには、

旧憲法と連続する欽定憲法なのか、新たに制
定された民定憲法なのかをはつきりさせる
必要がある。

美濃部の後継者、宮沢俊義ら次世代の憲法
学者は、欽定憲法ではなく民定憲法であるこ
との論証に力を入れ、図のBを争点化できる
「憲法制定権力」という概念を導入した。
「憲法制定権者としての国民」による、新憲
法の制定という枠組みの下に、占領下に行わ
れた既存の法秩序への大規模な介入を、正当
化しようとしたのである。

この日本国憲法は、君主政から民主政への
革命的な移行を含んでいるため、おのずから

民主主義のシンボルがおどり、民主的な統治
権力を構成した側面ばかりがクローズアップ
されてきた。学説レベルでは、こつこつ立
憲主義の議論が続けられてきたものの、図の
Bが示すように、立憲主義は争点化されず、
世論も喚起されなかつたのである。

* * *

しかし、ここへきて、冒頭に述べた通り、
立憲主義が再び争点化されたのだとすれば、
それは、争点が図のCに移動したこと意味
している。

まずは地方政治において、橋下徹大阪市長
による新たな民主政のスタイルが波紋を呼
び、遅れて中央政治においても、個人人気を
背景とする安倍晋三首相の暴走氣味の統治
スタイルが問題視されるに至つた。選挙区ご
との多数決である小選挙区制を背景に、選挙
時点での「民意」を絶対化する彼らのスタイ
ルは、ある種の国民主権の具現化であるが、

それは「多数者」の専制にほかならない。そうしたなかで、争点Cを突き破るように行われたのが、集団的自衛権の憲法解釈をめぐる、

7月1日の閣議決定であつた。

こうした状況下であればこそ、日本国憲法が、より十全な立憲政体に向けて、従来の統治システムに大改革を加えた側面に光をあてる必要がある。憲法は、新しい統治権力を構成する一方で、「その暴走を防ぐのにふさわしい仕組み」を組み込んだのである。

そして戦後日本の立憲主義がひとまず及第点には達してきた以上、「その暴走を防ぐのにふさわしい仕組み」として機能したのは何であったのか、という自問自答を、あくまで日本固有の文脈に即して繰り返さなくてはならない。そのもとで追求されてきた政府解釈の道筋も、捉え直されるはずである。

一見「国民自治」とも「自由主義」とも関

係がなさそうでありながら、それらが戦後日本立憲主義の要石であつたことは、間違いない。

疑う者があれば、1930～40年代の新聞を原紙で読んでみればよい。「極東の平和」を実現すべく、スピード感のある政治的決定を確保するために行われた「政治革新」と、岸信介ら「革新官僚」たちの暗躍。「高度国防国家」と果てしない軍拡路線。ドイツ・イタリアとの「同盟」政策。そのなかで皮膚呼吸を止めるように奪われる「精神的自由」。こうした名状し難い息苦しさをもつ世の中から、戦後の日本を解放した「仕組み」が何であつたかを、再考する必要がある。

もちろん、21世紀の国内外の環境変化をうけて、いつの日か統治システムの大膽な構造改革が必要になるであろう。巨視的にみて、7月1日の閣議決定が、こうした改革の一里塚であつた可能性を、排除することはできな

い。しかし、そうした改革局面においてこそ、
急激な変革をソフトランディング（軟着陸）
させるために、常に効果的なブレーキを内蔵
させる立憲主義の発想が重要になる。議論の
本番はこれからである。

いしかわけんじ 62年生まれ。東京大法卒。
専門は憲法

石川健次



作品 関根常雄

安倍政権 第2章

「経済最優先」信じたい

価を得るチーム編成ができるのか。首相自身が「本音では入れ替えたくない」と漏らしたと聞いた。

米大リーグの球団運営を描くノンフィクション「マネー・ポール」に、チーム編成を

担当ゼネラル・マネジャーが自らを戒める場

面が出てくる。
「現状でうまくいっていても、てこ入れを怠ると、痛い目に遭う」

野球も政治もマネジメント術にさほどの違いはあるまい。新たな刺激を欠けば、組織は惰性に流れがちだ。

とはいえる、安倍晋三首相にとつて今回の内閣改造・自民党役員人事は難しかったに違いない。戦後最も長く続いた顔ぶれを上回る評

民には分かりにくかったはずだ。「入閣待望組の不満を解消する」「来年の自民党総裁選に向けて党内基盤を固める」。政治家の私利私欲の話題が先行したことは、国益第一を訴えてきた首相には本意ではなかつたろう。

2年前に自民党独裁を争つた首相と石破茂氏の確執の再燃は、弱い野党を脇に置き、党内抗争に明け暮れた「古い自民党」を思い起させた。

あえて悪材料を先に持ち出したが、かつての自民党にはそうした権力闘争さえ党の活力にするズル賢さもあつた。石破氏が発奮して活躍し、地方経済が活気づけば安倍政権にも日本にもめでたしめでたしだ。そんな展開を迎えるかはどうかは首相の手綱さば

き次第である。

安倍政権の安定の背景に「第1次政権と比べて首相は成長した」「民主党政権よりも「という国民の思いがあつたのは間違いない。これから比較対象は改造前の内閣である。新閣僚にはハードルが随分と上がつたことを自覚し、身を慎んでもらわねばならない。掲げた政策に地道に取り組み、成果を上げる。評価を高めるには、この道しかない。一内閣一仕事とまではいわないが、あれもこれもと手を出す余裕はない。

失われた20年をすごしてきた日本の最重要課題が「国力の回復」なのは言をまたない。国政とはつまるところ国民生活に安定をもたらすことだ。

改造内閣は初閣議で、重視する7つの課題を決めた。東日本大震災からの「復興の加速化」に次いで打ち出したのが「経済の再生」、3番手が「地方の創生」なのは当然の判断だ。

「集団的自衛権に関する憲法解釈の変更の次はいよいよ憲法改正だ」。首相と近い保守派にはこんな期待もあると聞く。優先順位を間違えてはいけない。国のトップにはそのときどきで望むと望まさるとにかかわらず、取り組まざるを得ない歴史的使命がある。首相は改造後の記者会見で「経済最優先」を明言した。その言葉を信じたい。

編集委員 大石 格

成長の天井、改革で破れ

霞が関が空前の「地方創生」バブルに沸きたっている。

2015年度予算にむけた概算要求の特別枠では「地方航空ネットワークの活性化」（国土交通省）といった「地域」「地方」の

名を冠した政策がずらりとならぶ。

なかには「里地・里山の保全」（環境省）といった便乗気味の要求もある。安倍晋三首相は地方創生相に石破茂氏を起用、地方創生は改造内閣の金看板となっている。

「政治はバラマキをしがちだが、企業の新陳代謝を進められるかがカギ」と経営共創基金の富山和彦最高経営責任者（CEO）は警鐘をならす。

生産性の低いサービス業の中堅・中小企業の退出を促し、人材を集約した競争力のある企業がさらに生産性を高め、賃金上昇につなげる。そんな構造改革の視点が地方創生にも要る。

当面の経済政策の焦点は、首相が消費税を予定通り来年10月に再増税する決断をするか否かだ。国内総生産（GDP）の2倍を超える借金を抱える日本にとって、財政再建は避けられない道だ。

「2度目の増税ができなければ、市場におそろしいほどの衝撃を与えるだろう。たくさんの人間がこのメッセージを懸命に首相に伝えようとしている」。米ピーターソン国際経済研究所のアダム・ポーゼン所長は米ゴーラドマン・サックスのリポートで指摘する。本経済は4～6月期に年率6・8%のマイナス成長に陥った。先行きの景気下振れのリスクに目配りしつつ、10%への再増税ができる環境をいかにつくるかがポイントだ。

地方創生に名を借りた公共事業のバラマキは論外としても、15年度予算案でふだんより多めの予備費を積むといった転ばぬ先のつえは必要だろう。日銀も必要に応じて追加金融緩和でデフレ脱却を後押ししてほしい。そして日本経済の潜在成長率を引き上げるための成長戦略を速やかに再起動すべきだ。

「アベノミクスは失速している」とモルガン・スタンレーMUF G証券のロバート・フレルドマン氏はクギを刺す。

法人減税、岩盤規制の見直し、年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）改革などを盛った成長戦略を打ち出してから2カ月あまり。7月25日に首相は「肝心なのは実行とスピードだ」と閣僚らにハッパをかけたが、その後の具体化はほとんど進んでいない。国際通貨基金（IMF）も「構造改革で増税後への憂鬱感の解消を」と背中を押す。

そもそも給付抑制を軸とした社会保障の抜本改革は消費増税の大前提だ。原子力発電所の再稼働、環太平洋経済連携協定（TPP）交渉という宿題もこなしつつ、0%台にとどまる潜在成長率という成長の天井を突き破っていくことが、日本経済再生策の本丸だ。

編集委員　瀬能　滋



作品　関根常雄

映し出す昭和史の断面

ことは誠に結構である」などと語つたことが実録に記されている。

結局、親書はソ連に届けられたものの、ソ連は近衛文麿・元首相の特使受け入れを拒否。親書の写しがスター・リンからトルーマン米大統領に手渡された。会談後、日本に降伏を求めるボツダム宣言が発表され、ソ連は8月8日、日本に宣戦布告し参戦する。

昭和天皇は第2次世界大戦の降伏直前まで、ソ連による和平仲介に期待を寄せていた。実録によると、天皇は1945（昭和20）年7月7日、鈴木貫太郎首相に「ソ聯邦に対し率直に和平の仲介を依頼し、特使に親書を携帯させて派遣しては如何」と伝えたとされる。

さらに18日には、スター・リン・ソ連共産党書記長が米英首脳と独ボツダムで会談する前に自身の親書が届いたかどうかを東郷茂徳外相に確認し、「ボツダム会談前に我が

方の申し出を先方に間に合うよう伝え得た一方で、昭和天皇は降伏直前、三つの神社

一方で「敵国撃破」祈願

に相次いで戦勝祈願もしていた。

実録によると、45（昭和20）年7月30日から8月2日にかけて、大分県の宇佐神宮、福岡県の香椎宮、埼玉県の氷川神社に勅使を派遣。「由々しき戦局を御奉告になり、敵国（敵國）の撃破と神州の禍患の祓除（祓除）を祈念される」と記されている。

所功・京都産業大名誉教授（日本法制文化

史）は「勅使派遣は、例祭など日程が前から決まっていた恒例のもの。本土決戦がなお叫ばれていた当時、神社で戦意高揚を祈るのは当然のことだろう」と話す。

原武史・明治学院大教授（日本政治思想史）は、続いて収録された「皇國の荒廃につながる甚だ由々しき戦局にしあれば、国内ことごとく一心に奮いたち、あらん限りをかたむけつくりして敵國（敵國）を撃ち破りこと向けしめんとなも思し食す」（大意）との「御祭文」に注目し、「これを額面通りに受け止めるのは無

理がある」と疑問を呈する。

「当時、母の皇太后（貞明皇后）を輕井沢に疎開させることになつており、それは徹底抗戦が大前提だった。新羅などに勝利したとされる神功皇后を祭る香椎宮と、その時に身ごもつていた応神天皇を祭る宇佐神宮に勅使を遣わしたのは、戦争継続を唱える皇太后の意向に配慮した結果では」

天皇が始祖と歴代天皇にあてて読む「御告文」や神にあてた「御祭文」は従来ほとんど公開されてこなかつたが、実録では新たな資料として数例が示された。

沖縄メッセージ直接触れず

現在では学界の定説となつていながら、記載されなかつたことも少なくない。

47（昭和22）年9月19日に天皇が御

用掛の寺崎英成を通じて、連合国軍総司令部外交局長のシーボルトに伝えたとされる「沖縄メッセージ」。79（昭和54）年に米・国立公文書館で見つかった資料により、47年当時、天皇が米国による琉球諸島の軍事占領継続を望んでいたことや、米国の沖縄占領は日米双方に利益をもたらすなどと述べていたことが明らかになつてゐる。

実録では「寺崎英成の拝謁はいあつをお受けになる」「なお、この日午後、寺崎は（略）連合國最高司令部外交局長ウイリアム・ジョセフ・シーボルトを訪問する」と記述。続けて、米国側の資料を伝える形でメッセージの内容に言及している。

宮内庁書陵部の詫問直樹編修課長は「寺崎が陛下に拝謁したことは確認できたが、寺崎が陛下から伝言を託されたことや、その内容については確認できなかつた」と説明する。

78（昭和53）年10月23日に中国の

鄧小平副首相と会見した際に述べたとされる謝罪の言葉についても、宮内庁は「確認できなかつた」として、「両国の長い歴史の間には一時不幸なできごとがあつた」という発言のみを記載。だが後年、「迷惑をかけ、心から遺憾に思います」などと述べたとも報じられていた。

天皇が靖国神社へのA級戦犯合祀に不快感を示したこと記した富田朝彦宮内庁長官のメモは2006年7月、日本経済新聞の報道で明らかになつた。実録は88（昭和63）年4月28日に天皇がA級戦犯合祀について富田氏に話した事実は記すが、発言内容は「宮内庁として是認したわけではない」として触れていない。

戦争責任と退位をめぐる45（昭和20）年8月29日の天皇の発言にも、他の資料との齟齬がある。「木戸幸一日記」によると、天皇は「戦争責任者を聯合国に引き渡すは真

に苦痛にして忍び難きところなるが、自分が一人引受けて退位でもして納める訳には行かないだらうか」と語つたとされる。

だが実録では「自らの退位により、戦争責任者の聯合団への引渡しを取り止めること

ができるや否やにつき御下問になる」と記され、ニュアンスが異なる。

また、今回の実録では、「百武三郎日記」や「松平慶民手帖」など、従来知られていないかった資料約40点が出典として示された。

百武三郎は36（昭和11）年～44（同19）年に昭和天皇の侍従長を務め、松平慶民

古川隆久・日本大教授（日本近現代史）は
「現状では実録の記述が正しいかどうかを
第三者が検証できない。亡くなつて20年以
上もたつ昭和天皇に関する資料はすべて公
開するべきだ」。

とはいゝ、今回の実録が「昭和天皇の生涯
を叙述した重要文献」という点では研究者の
評価はほぼ一致する。今後は記述内容の詳細
な分析や、新たに存在が判明した資料の公開
請求と検討が行われることになる。

（宮代栄一・北野隆一）

（平成二十六年九月九日朝日新聞に掲載）

は最後の宮内大臣を務めた人物だが、遺族の
意向などにより内容は明らかにされなかつ
た。

また、皇室の「お手元文書」であるなどの
理由で非公開の資料も多い。実録の個々の記
述が、どの資料のどの部分から引用されたの
かなども示されていない。

定例講演会

於・八重洲富士屋ホテル

アベノミクス

世界経済の潮流と

日本経済の方向

第一生命経済研究所

首席エコノミスト

熊野 英生



時局を体感して日本の山積する課題をお話しください、ありがとうございます。これといった大きな質問ありません。しかし個人的にすごく気になつていてあります。経済と関係ないかもしませんが、きょうの皆さんの中には幾つかのキーワードがありました。中国という話と、医療費の問題です。その一つに中国で発生している「毒の霧」と書かれていた大気汚染です。中国については知つていて、あまり知つていらないという方が本音です。そこでこの大気汚染の流れが、日本上空に流れてくるという話を聞くたびに、実にいやな感じを抱くのです。日本にもかつてはそうした時期がありました。いろいろな公害問題があつて、犠牲者の方も沢山あつて、それがいろいろな努力の結果大きく改善がされて今に至っています。当時に比べると非常に低い公害というか、どんどんよくな

つているような気がするのです。

中国というのはそうした公害に対する改善策を行つたり、上手に管理をしたりしているのでしょうか。もしくは、また日本からそういう技術を使つたりして抑えていくようなことで具体的に何か動いて見たらどうかと思います。

先ほど農村部から歳に向けて人がどんどんどん入つてきているとかいうことを聞きました。これは中国の発展的な部分を取り出していえることであつて、日の当てる発展の部分です。大きな都市に続いて、二番目、三番目、四番手の都市もどんどん発展しているということもあって、ますますひどくなるようなイメージだけはあるのです。

その辺りがなかなかはつきりとして見えないところで、日本人が健康を害していくのではないかといったところがあるので、ですが、何かその辺のところでちょっとお話を

が聞けたらと思つております。

○熊野氏 ありがとうございます。

ニュースなどを見ますと、もう既に韓国ではPM2・5が流れ込んできて、非常に甚大な被害が出ていると思います。大気汚染の問題というのは、多分、人権意識の問題じゃないかと思います。つまり、国民、あるいは、近隣の国民、そういうところに迷惑をかけていいのか。経済発展を第一にしてというか、個人の利害のために公害を起こして、そのまま垂れ流しでいいのかどうか。

日本人は非常に奥ゆかしい素質を持つており、他面に見栄の文化もあるのかもしれませんのが、自分の家がごみを出しつ放しにして、隣の家に臭いにおいを出す、こうしたことはやめたほうがいいと強く思っていますが、それはやっぱり美意識であり、人権意識でもあります。自分がやつてほしく

ないことを他人にやつてはいけない、こうした日本人特有の倫理観は、もともと文化としてあるものであつて、最近に出てきたものではありません。古くからある美意識

の一つとして育まってきたものです。やっぱり、下から求めていくことには時間がかかりますから、中国共産党とか、そういうところから、教え込んで決めていくといった感じで、もうちよつと考え方直すべきだと思います。

P M 2・5は中国の共産党の高官、北京に住んでいる共産党の高官も味わつていては必ずという意見があるのですが、これは裏がとれてない話なので、人から聞いた話の受け売りですが、参考までお話しします。

別の中国の専門家に、大気汚染のあの話を聞いて、私は驚いたのですが、そのことは本當ですかと尋ねたら、そんなことはないと言つていたのです。中国高官もやっぱり汚れた空氣のところにいると言つていました。

ある中国の専門家によると、中南海、チユウナンハイとその人は言つているのです。が、チユウナンハイではみんな空氣清淨器

をすごく完備していて、それも全部日本製ということです。共産党の高官が家に入るといふと、P M 2・5がどこへ行つたかよくわからないくらいです。

あと、中南海というのは、森に囲まれていて、大分汚染空氣はないらしいのです。だから、中国高官はP M 2・5と関係ないところで生きているので、庶民のそういう感覺というのはなかなか共有されないのです。

でも、言わんすることは、中国の高官が大気汚染の問題が自分のことだと、さらには海外にもそういう汚染を垂れ流している

のだという意識については、疑問の余地があります。中国という国が、中国指導者や高官が、そうしたことについて物すごく配慮するぐらいの志の高いというか、そういう礼節を知るような状態にならないと、やっぱりなかなかいい外交関係は得られない

と思います。もつと言えば、尖閣問題でいい妥協点というのは、なかなか得られない

と思います。昔の人はよかつたという話をしてしまうと、ちょっと大ざっぱになりますが、いろいろな書物で、鄧小平の話とか周恩来の話を読んだり聞いたりすると、やっぱり昔の中国のリーダーというのはすごく志が高かつた。今は体制維持のために、どちらかといふと、近視眼的になつてゐるのかなと思うのです。

周恩来とかが、日本との戦争で大きな被害があつたにもかかわらず、あれだけダメ

ージを受けたのに、賠償金については、日本から賠償金は要らない。そして平和条約はなかつたのですが、外交を正常化しようということになりました。あれは今の中国のリーダーでは考えられないぐらいの英断だと思います。

周恩来は病氣で寿命もなく、先行きがなかつたので、そういうことをしたのではないかという見方もあるのかもしれません、もうちょっと中国が人権意識に配慮しながら、リーダーがもう少し大所高所で、単に面子だけにこだわるのではなくて、もうちょっとフェアな外交関係を築けるようになると、日本と欧米みたいな形では議論はできないのではないか。

だからと言つて中国の共産黨の幹部がそういう感じだから、中国の國民が全部おかしいとは全く思つてはいけないと思います。中國の人たちとは、韓國の人を除いてです

が、個人的には仲よくなつて、國のあり方としてはまた別の議論で議論するような、台灣と中國みたいな関係にだんだんなつていかないといけないのかなと思います。

○質問 いろいろと皆さんのお意見を伺

つて、政治的過去を振り返つて、日米通商摩擦とか、そういうのがあつたときに、アメリカの民主党政権の、クリントンさんのときに、みんなが日本の製品をバットで殴つて壊したりしていたことがあつて、日本人として気持ちが非常に痛いといふ思いがありました。あのときに、当時、余り有名ではなかつた官房副長官だつた小沢一郎さんが竹下さんの密使となつてタフな交渉をして、一人でまとめて上げてきました。

小沢さんは非常にダーティーなイメージが大きいのですが、裏で日本の国益を本当に担つていました。やっぱり腰の重い粘り

強い政治家が昔はいて、最近、どうなのでしょうか、私なんかが見る限りだと、なかなかこれから日本を背負つて立つ政治家というのが余り見受けられないような気がしてまいります。

将来に向けてそういう方とか希望の星みたいな方がいたら、また注目していきたいなど思いますが、お意見をお聞かせください。

○熊野氏 二〇〇九年に民主党政権が政権交代を果たしたときに、私はこれから日本は変わるかなと一瞬思つたのです。

なぜならば民主党の若い当選一回、二回と、余り政治の世界にすれていらない人たちと一緒にテレビとかBSとかの討論会で会つて話をしたりすると、やっぱりすぐ洗練されていて、当選一〇回とか一二回とか、そういう人たちのところに行つて話をした

りするのと違つて若鮎のようにフレッシュで感じがよく、どつちかといふと際立つて古株の政治家たちは、オールドエコノミーなのです。

どういふことかといふと、でーんと椅子に座つていて、詳しい話はまあいいからといふ感じで、細かい実務の話をするよりは、言つた言わないとか、まさに浪花節の世界だと思うのです。

それに比べると、民主党の若い人たちといふのは本当にビジネスライクで、ビジネスマンのような感じがしたのです。はつきり言うと、自民党の若手も民主党の若手もそんなに差がないのです。民主党はそういう若手をどんどん登用しながら新しい政治をやつしていくのか。十日ぐらいといふか、一ヶ月ぐらいといふか、すごく期待していたのですが、出てきたのが鳩山さんであり、菅さんだった。

菅さんが首相になる前に、大臣のときにはエコノミストが何人か呼ばれて行つたことがあります。どういう対応だつたかといふと、ほとんど寝たふりといふか、寝ているのです。聞いているか聞いてないかわからぬのです。私の前に来たエコノミストの話を聞いてみると、菅直人は寝ていたと何人か言つていて、これかと思つて自分に言い聞かせたくらいです。

でも、菅さんのすごいところは、寝ていた、あるいは寝たふりをして、レクチャーやが終わると質問してくるのです。よく本編を聞かないのに質問できるな、すごいなと変なところで感心したりするのですが、これつていいのでしょうかね。

実は、私、菅さんとの付き合いは歴史が古いのです。私は昔、武藏境という中央線の駅に住んでいたのですが、若いころの菅さんは本当に精悍で、武藏境の駅

前で、周りにだれも人がいなくて、自分一人で演説していたんです。昔、二十年前に菅さんを見たときの顔と御進講に行つたときの菅さんの顔は全然違うのです。若手青年実業家が、古だぬきぐらいの人相に変わつていています。だから、民主党にはあれだけ豊富な人材がいたにもかかわらず、トップに立つたのは菅さんとか鳩山さんだったのでしょうか。

野田さんは、次の總理になつてもいいのではないかぐらいいの人だと思ったのですが。一時期言われたのは、自民党が野田だったら最高だ！みたいな話もあつたりして、組織全体としてはなかなかつかみ具合にたけた人だと思つていました。しかし若手のノウハウを使いこなすまでにはいかなかつたのかなと残念に思います。

小沢さんがすごいという話はいろいろなところで聞くのです。しかし問題は、小沢

さんは、十五年、二十年前に活躍した政治家であり、今はもっと次々にかわらないといけないと思うのです。

私は今四十六歳で、私が生まれた年は高杉晋作が死んでから百年目だったのです。大政奉還があつてから百年目だったのです。百年前、私の出身の長州藩はどうだつたかというと、松下村塾の志士たちが次々に戦死したり、詰め腹を切られたり、次々に人材が死んでいって、有望な人が早く死んでいつてしまつたのです。しかしぬくから次へ次世代を担うような人が出て来て明治維新が起つたのです。

今の日本も小沢さんがすごいという世界から、次から次へ次世代の政治家が出てこないといけないのでないかと思うのです。高齢社会というか、組織の高齢化、政治家の高齢化というのは重い問題で、世の中全体が若者が、活躍するような世界にならな

いと、政治家もなかなか世代交代しないの
で、そういう意味では心情的、思想的には、
昔のヒーローたちがいまだに活躍してい
る期待しているのです。

「永遠の〇」を私はまだ読んだことがな
いのですが、零戦は一九四〇年は最新鋭だ
ったかもしれないですが、一九四五五年は完
全に旧式化していたのです。設計者の思想
 자체が旧式化していた。「永遠の〇」がすご
いとか言つていると永遠にゼロだと思いま
す。やっぱり世代交代。それが大切なので
はないでしょうか。新陳代謝で常に新しく
よみがえつていないとダメだと思うのです。
もちろん世代交代というのは、シニアな
人は黙つていろいろという意味では全然なくて、
次から次へ若い人、中高年、シニアな人、
どんどん出てくればおもしろいのではない
かと思うのです。そうなつたときに日本は、
本当に政治は活性化するのではないでしょ

うか。社会が活性化するのではないかと思
います。

質問

経済のことは実に難しく、個人的に言つ
てもかじ取りが難儀であります。先ほど熊
野先生は四六歳といわれましたが、私は同
じぐらいの世代です。昭和四〇年生まれの
四八歳ですが、先ほどのお話で、世代交代
という話があつて、今一番私が危惧してい
ることが少子化問題です。これから日本
は、この問題についてどうなつてしまふの
でしょうか。今後の人口問題の動向は大き
な関心事です。業務とする賃貸のアパート
の顧客向け建設に大きく影響するところで、
日々徹底した調査分析を以てマーケットに
臨んでおります。

人口減少の趨勢もさることながら、次の
世代、いわゆる子育てということに関して、

余りにも今の政策的なところがおろそかになつてゐるのではないかなど危惧しております。比較的レベルが高いといわれる東京でも、待機児童のほうがまだまだ改善もできてない状況です。

私どもは別に今、キッズパートナーとい

うのを展開していますが、そういつたとこ

ろも役所のしがらみで、なかなか展開できないような状態になつています。教えていただきたくよくよろしくお願ひします。

少子化問題についてもアジアでは、韓国であつたり中国であつたりすると、中国だったら一人っ子政策で、とにかく教育のほうに力を入れて、大学に入れなかつたら人じやないみたいな風潮があるところも聞いています。あと、韓国に至つては、英語がしやべれなかつたら本当に先真つ暗なことも言われています。

先ほど先生も、お子さんのお話をされま

したが、うちの子どもを見たとき、将来丈夫かなという不安があつたりします。そういうたところで、アジアのいろんな方とお話しされて、日本のこれから世代交代について何か御意見があつたらぜひお話しください。

○熊野氏 まずエコノミストじやない話から致しましよう。エコノミストらしくない話からすると、私の家の隣の隣に、奥さんがベトナム人で、ベトナム人と日本人のハーフの子供がいるのですが、土日、実はうちに遊びによく来て、土日、必ず私は子供の相手をして、子供とへとへとなりながら、遊んでるので、そこで私の子供とベトナム人とのハーフの子供を見て思うのは、日本人の純潔の男というのは、うちの子供は男の子なのですが、本当に活力がないなあと思います。

アジアの人全般がそうかどうかよくわからりませんが、自分の国を離れて海外に来て

生活している人には、やっぱり活力があつて、そういう人と話したり一緒に遊んだりすると、日本の将来という面では活力を失つていつて現状なので、真剣に考えてみるようになるのです。

コンプライアンスと言つていること自体が、実は活力が失われている証拠ではないかと思うのです。だんだん弱くなっていくので。敵はうちにあるのではないかなと思うくらいです。例えば、少子化と言いますが、昔は子供がたくさんいて、私が変なことをやると、見ず知らずのおじさんから怒られていたものです。今、そういうことはほとんど見かけなくなりました。見ず知らずの子供を怒つたら、その親がどなり込んでくるのではないでしようか。これは学校の先生が一番そういうのに戦々恐々とし

ています。だから、子供の活力が失われてしまうのです。

私の子供は、消防少年団という近くの消防署の活動に参加して、去年は、活動していたら、お風呂で滑つて尾骶骨を折つてた。そうすると、消防署の人たちが青ざめて、「息子さんをけがさせてしまいました」と言つてきましたが、そんなのは自己責任じゃないですか。ですからやっぱり、そういう意味では少子化において、子供が少なくなること自体問題なのですが、子供が活力を失うような原因はほかにあると思うのです。子供は親を見ながら育つていると思うので、大人がもう少し活力を取り戻せば、子供も活力を取り戻すのではないかと思つています。

あと、大東建託さんの仕事に何かアドバイスというと、業界を知らないので不遜だと思いますが、これからは都市部の中古物

件というものが、これから稼働する資産として有望なのではないでしょうか。例えば、私の父、母は山口市のだ真ん中に、結構大きな家に住んでいるのですが、うちの父が亡くなつて、母が亡くなつて、私が受け継ぐかといったら、絶対受け継がないです。そういうように、昔、非常に立地条件のいいところにお金をもうけて住んだ人たち、そういう人たちがだんだんシニアになつて、だれもそれを受け継がない傾向があります。これは資産を死蔵しているようなものだと思います。だから、中古物件をどうやって稼働資産に変えていくか。これは恐らく、都市政策といつたものが絡んできますが、そういうところが重要かと思います。

日本というか、高齢社会というか、日本経済全体が十年前の常識が今ではなかなか通用しなくなっています。恐らく今、新しいものはいいことだと。つまりアパートや

マンションは新しく建つたものがいいという感覚がまだあると思いますが、これが崩れて、中古物件には意外に掘り出し物もあるということが消費者の間に広がってきています。相続税とか税制とか、住宅ローン減税みたいな、借り換えるときのコストを補てんするみたいなのでいいのですが、そうしたところで政府がもつとうまくやれば、町の外に住んでいた人が町の中に住むようになるでしょう。そうすると優良物件で、不稼働資産だった部分が稼働し始めるでしょう。そうなつてくると、すぐよくなると思います。

商店街の活性化を考えるときに、高松に行つて、地元の丸亀町商店街という結構有名なところでヒアリングしたのです。そのとき、その理事長さんが言つてたのをよく調べてみると、商店街の周りにだれも人が住んでないじやないです。だから、商

店街の周りに高齢者が住むようなマンションをつくつたり、病院をつくつたりすると、職住接近ではないですが、商店街の周りに人口がふえてきます。そうすると、町の購入力が高まつていくことになります。今、恐らく郊外に建つマンションとかをサポートしているのではないかと思いますが、実際はその逆のビジネスみたいなことも、これは大東建託さんでなくともいいのですが、そうした点に着目して考えると、そこにもビジネスチャンスが眠っているのではないのかなと思います。

話を聞くと、何だつたら売れるのか、何だつたらみんなが楽しめるのか。そういうことをぜひ聞きたいと、そういうように編集長経験者とか、本屋のシニアエディターの人たちは異口同音に言っているのです。お話をのように、テレビだつたら何だつたら見るのか、何のテレビだつたらいいのか。そういうのがもありましたらお聞かせ願いたいと思います。

○熊野氏 今のお話で、例えばテレビを見ても国会中継にも興味がない。スポーツだったらわーわーできるということですが、このお話の中にいろいろと興味深いものがあるまれでいると思います。

今、新聞業界とか本屋さんの業界の人に

アップしないと思います。そういうのは若いエネルギーを単なる消費に貢献している

のに過ぎないと思います。

私が何で読書をするかというと、あした役に立つものではないし、具体的に何か役に立つかという話よりも、知識に対する貪欲さがあつて、だから本を読むのだと思います。あるいは、自分の知らない分野に関して、自然科学の話とか歴史とか、海外情勢とか、知らないことを知りたいと思って読んでいるのです。知らないことへの出会いがあるからです。

若い証拠かもしませんが、うちの妻はスマホをずっとといじくつているのですが、多分、そういう発見は余りないのでないかなと思います。これはやっぱり子供が減るだけじゃなくて、子供の教養主義、昔の古きよき教養主義が、だんだんネット社会によつて掘り崩されているのではないかな

と危惧しています。

本来、ネット社会というのは、知識層にとつてはすごいパワーのあるツールだつたと思うのです。それは凄いパラドックスなのですが、ネット社会というのは、それを活用しようとする者にとつてはすぐ便利でいいツールなのです。

そこで時間を潰そうとすると対極になつてしまふので、恐らく今後はインターネットというか、ネットが普及すると二極化が起ころのではないかと思います。日本がそうした状況で少子化を迎える中で、自分の子供たちが知識に対する貪欲な精神を維持できるかどうか疑問であり、そこはちょっとクエスチョンマークだと思います。

もしも自分は国会中継のかわりに、これが見たいというコンテンツが三つぐらいあつたら是非教えていただければ、ほかの方でも結構です。

○岩尾

今日はこちらの席は抨聴するだけかと思つていましたので安心しておりました。弁護士の岩尾です。私は経済に関してはど素人で、どちらかというと法律系なもんですから。ただ、今仲間たちに聞いてみると、先生がおっしゃられた、景気も少しよくなつてているのではないかと言いますが、どうも自分たちの周りだけは氷河期のまま進んでいるのかなと思うのです。実感としてはないけれども、ただ、雰囲気としては確かにあります。

自分も民主党政権誕生のときは過大な期待をしました。その結果どうなつたかといふと、ごらんのとおりですが、これは我々の責任ですから仕方ありません。ただ、安倍さんになつてきて、そして、アベノミクス云々と世間は今大きな期待をかけています。

これはアベノミクスなのか安倍さんのミスなのかわかりませんが、ただ世の中の雰囲気だけはよくしてくれたなと。これは自分としては安倍さんに対しては感謝しなければならないと思っていて。でも、それ以外のことはどうなのかななど、首をかしげてしまうのです。

そして、つい最近の新聞でしたか、補正予算を消化しきれないのではないか。これは今、予算で執行するのは土木とか建築になると思うのですが、そういう人材も機材もないのではないか。だから、予算が余るのではないか。余れば当然、経済の活性化には向かないはずですし、それはどうなるのでしょうか。

自分としては、やはりもう少し景気が実感できるようになつてほしいと自分の中では思っています。これは竹中さんの時代でしたか、協調よりも競争、競争原理。競争

が善で、協調が悪と言われていたと思うのです。私からすると、これに対しては、それは違うのではないかという疑問を持つてきています。競争する職種もあつていいが、日本人というのは余り競争にはなじまないのでないかなと思つてゐるのです。自分が余り競争が好きな方ではないからかも知れませんが、それに対して先生はどういうお考えでしようか。

○熊野氏 ありがとうございます。

どうなつたら氷河期が、今の状況から黎明期に変わらのかというのは個々に考えてみないといけません。一つとして重要なのはやつぱり賃金が上がるということなのでしょう。あともう一つは、昇進、昇格といつた場面がいろいろ起こつてくることだと思います。

だから、自分が昇進、昇格するためには

あと何人この人たちがここを動かないといけないとか、そういうのがなくならないと将来展望が見出せないと思うのです。

あと、トリッキーな話をして、副業が認められるようになると、もうちょっと将来的の展望が見出せるのかもしれません。概念的に言うと、自分のやりがいが実現できるようなチャンスに、もうちょっと恵まれるような状況になつてもいいのではないか

と思います。今日ですが昼間のランチミーティングでレクチャーしたときに、隣にいた人が国家公務員で大学をリタイアした後、ある組織のトップになつた人ですが、国家公務員の時は、報酬を受け取つてはいけないことになつているとおっしゃっていましたが、あんなに知識のある方が国家公務員のルールに基づいて、国家公務員の組織のトップは報酬をもらつてはいけないことになつてゐるということです。これでは、

モチベーションがゼロとは言わないまでも、すごく低くなってしまいます。だから、これは競争を礼賛することになるかもしれません、やっぱりチャンスをもうちょっと豊富にしたほうがいいと思います。

これは、恐らく、子育てとかにも言えることだと思いますが、子育てを支援するためには、会社が労働時間をもつとフレキシブルにしないといけないと思います。それをやるときに何が障害になるかというと、これは私の一つの見方ですが、女性の仲間内での評判というのが多分問題になつてくるのです。

会社に出てくるのは八時間のうち二時間でもいいと。こういうふうなすごく柔軟性のある子育てのフレックスタイムをつくると、一〇〇人のうちもしかすると三人ぐらいいがこれを悪用するかもしれません。そうすると、三人の行状に対して、ほかのまじ

めにやつている女性が、あんなことして、こんな制度をつくるのがよくないということになって、この制度はオジヤンですね。

恐らく政府主導で法律を通して、こういうフレキシビリティーの担保されている雇用体系なり労働の形態をつくつたとすると、国がその批判をもろに浴びてしまうので、多分できないと思います。だから、民間ベーツで女性が働きやすい、子育てしやすいような、そういうのを、時間はかかるかもしれないけれども、やらないといけないのではないのかなと思います。

あと、補正予算についてお話しします。公共事業を補正予算で増やせばいいというのは、過去の遺産のような気がします。地方の中小の建設業界の人に話を聞くと、公共工事は全然もうからないと言つていました。何でそういうふうになつたかというと、入札制度が競争入札になつてしまつて、だ

んだん規模が小さいところまで入札しないといけなくなってきたからです。何で入札するか。これは、公共事業など、官製工事のもうけ過ぎ、高コストになるので、民間と同じベースでやらないといけないという話なのです。

でも、民間の工事つて需給がぼろぼろになっていて、すごい赤字受注みたいな感じではないですか。何で需給が崩れたほうのプライスを、公共工事に当てはめるのか意味不明です。

猪瀬知事はやめましたが、猪瀬さんとの見積もりは一三〇〇億円ができるとやつたのです。これも何か日産スタジアムに開閉式ドームを組み合わせれば一三〇〇になるという物すごく雑な計算なのです。しかしやはり一三〇〇億はちょっと安過ぎる

ぎるだろうということでクレームがついて、文部科学省だった、どこだったかな、国土交通省じやなくて文部科学省だったかが業者に試算し直したら三〇〇〇億円だったというのです。

だからやつぱり「官製買いたたき」というのが公共事業のポテンシャルを落としていて、公共事業を請け負うけれども、もうからないということです。建設業者がもうからないから雇用もふえないし、設備投資もふえません。だから、そういうふうなミクロ構造、現場における機能不全を直さないと、幾ら公共事業を積み増したって昔のような効果は出てこないと思います。

よく考えると、去年は一〇兆円の公共事業をやって、一〇兆円の補正予算をやって、今年はまた五・五兆の補正予算をやるのです。本当に去年の一〇兆円がきいていいならば、ことし何もやる必要ないじやないで

すか。

波及効果というのは、一〇兆円を出したら、その次は三兆円、二兆円、一兆円と、どんどん玉突き現象に需要が拡大していくはずなのに、そうなつてないというのは、まさに建設業界が青色吐息なので、波及効果がないということなのかもしません。

公共事業については、用途についてもうちよつと考えてみるべきだと思います。値段についても、そんな安くなくていいじやないか。もうけ過ぎでも多少いいじやないか。そういうふうに寛容になることが必要だと思います。

あと、競争に関しては、どちらかというと、私は、競争OKの人間なのです。だけど、これはなかなか難しい問題で、私は競争OKなのですが、みんなも競争OKですか。だったらみんな競争の中に入りましょうというのは違う話かなと思います。

しかしよつと違うのは、そういう労働の仕方をみんなに当てはめていいですかということです。これは止めたほうがいいと思います。だから競争する人と、つまり競争市場にエントリーする人と、エントリーしない人をはつきり分けるべきなのだと思います。

私の知っている人で、ワタミの会長がいます。今は選挙に出たりインターネットでいろいろばろくそに書かれていたりするのですが、最初、知り合ったときに、ワタミの社長の本を読んだのです。すばらしいことが書いてあつたのです。そうだ四八時間働き続けば利益は上がる。本当に寝ないで四八時間働き続けたのです。こういう考え方の人がいるのだ。競争が大好きな人はワタミの社長みたいに四八時間働けばいいと思うのです。私もやらなきやいけないことがあつたら、恐らく四八時間稼いで利益を上げると思います。

います。今の非正規の問題についても、非常に社会に誤解がありますが、非正規の人たちのみんなが正規社員になりたいとは思つてないのです。

私の親しい人で、もう四〇近いのですが、自分は役者で食っていく。役者でいつ仕事が入るかわからないから、テレビの仕事が入るかどうかわからないから、自分はパートタイマーみたいな形で定職を持たないと言つているのです。そういう人は仕方ないです。だから、非正規が全部悪いかというと、そういう形にはなりません。少なくとも、自分は正社員になつた経験がないけれども、正社員になりたいと、そういう人に関しては多少ハンドゥーがあるかもしれません。エントリーできるようにする必要があります。でも正社員になつたらやつぱり四八時間働かないといけないかもしけないので、競争市場全部に当てはめることは

まずいでしよう。しかし競争自体を否定するものではないというのが私の考え方です。

○質問が来たらこれを聞こうかなと思つていたことがあります。全然違う話なので、それでもいいかなとちょっと思つていていますが、アベノミクスで成長戦略のところがまだ全然出てきてないという問題があります。カジノとか、その辺の話も出てくるのじやないかということで、去年の夏ごろからちよこちよこ話とはしてはいたのですが、実際、その辺のことはどうお考えでしょうか。

○熊野氏 多分、カジノの話は前の石原都知事のアイデアの残像なのだと思います。外国人を呼んでカジノをやろうというのが基本的なアイデアだと思いますが、外国人を呼んでいろいろ市場を開こうというのは、カジノが一番先だとは云えないような気が

します。医療ツーリズムのほうが先だと思
います。ほかにも労働市場でもいろいろあ
りますが、大学もやっぱり外国人をたくさん
連れてきて、もうちょっと開国しないと
いけないと思います。

カジノが悪いとは全然思いませんが、だ
けど、カジノより先に開くべき市場がある
のではないかなど思います。

○熊野氏　この会で本当に珍しく思つたこ
とは、参加した人々が発言を強要されると
いう、これは初めてです。実は、昔、会社
の指令で札幌に行けと言われて、そこで投
資家との懇談会をやつたのですが、六人ぐ
らいしか人がいなかつたので、一人一人意
見をみんなに聞いていったのです。そうし
たら、帰つたらクレームが来ていて、講師
が聴衆に質問は強要するなど怒られたこと
がありました。

それだけこの会というのは開かれた会と
いうか、クレームを言う人がいないといふ
ことなので、それは素晴らしいことではな
いかと思って、やや感銘しております。歴
史と伝統のある会であり、見識高い会員の
皆さんと親しく交わることができ、今日は
本当にありがとうございました。

わが回想記

早稲田大学名誉教授

堀江 忠男

戦争のなかの個人・民衆

米国側は「F-14戦闘機撃墜」から一転して誤認を認め、レーガン大統領が犠牲者への損害賠償まで示唆している。事態は一応落ち着くであろう。

イメージ艦ビンセンズのウイル・ロジャー
ズ艦長も「犠牲者」だ。彼は五月末にペルシヤ湾へ派遣の命令を受けた時の記者会見ではこういった。

ニュース写真「撃墜されたイラン航空機に乗っていた両親の安否を気遣い、ドバイ空港で泣き崩れるイラン人少女と少年」の表情が、哀れで見るに忍びなかつた。犠牲者二百九十人とその家族たちに、これと同様の突然の悲劇が起つたのだ。

それが統合参謀本部への報告で「すべての情報から判断して、艦と乗務員を守るために行動をとつたのだが、この重荷は私が一生背負う」と述べる運命に陥つたのである。

事件自体については、イラン側は米国の挑発行為だと主張し、ホメイニ師は「米国とのしもべとの全面戦争におもむけ」と号令した。しかしその後、具体的な行動の指示は何も出さないようだ。

戦争とは、兵士個人からいえば、「殺されないために殺す」立場に追いこまれることである。戦場地域の民衆からみれば、殺人、放

火、強盗などの危険にさらされることである。

イ・イ戦争と日本国憲法

一九四〇（昭和十五）年の夏、漢水渡河作

戦に参加したときのことを思いだした。深夜、

河を渡つて進軍すると、すべての村落が火柱となつて燃え上がつていた。前進した背後から敵に奇襲されないためといふ「作戦上の必要」かららしかつた。人殺しが「榮誉」となり、放火が「必要」となる。それが戦争であつた。

二百九十人の犠牲者も氣の毒だが、八年前に領土争いから始まつたイラン・イラク戦争がまだ続いていることが悲劇の根源だ。日毎に前線では兵士が斃れ、後方では空襲で民間人の死傷が出ているのだ。

大義名分のはつきりしないイ・イ戦争の早期の終結を祈りたい。

（88・7・9）

「現世」を棄てて来世を獲ようと志す者は、アッラーの道（イスラム教）のために戦うがよい。戦死しても凱旋しても、われらがきっと大きな褒美を授けてやろうぞ」（コーラン）

これは、神が聖戦（ジハード）について語つてゐる一節だ。「勝つまで戦争を」とイラン国民に「聖戦」継続を呼びかけてきた最高指導者ホメイニ師が何度か引用した個所かも知れない。

イラン政府が十八日、国連安保理事会の停戦決議受諾を通告し、二十日、ホメイニ師が「毒を飲むより苦しい決断だが、神の御旨に従つて」停戦受け入れを声明したことで、イ・イ戦争は終結への道を踏みだした。ホメイニ師は「イランは世界にイスラムの

教義をひろめ、シオニズム、資本主義、共産主義を根絶することを意図している」と、な

お、強硬姿勢を示している。戦死した殉教者の家族や、敗北に等しい停戦に不満な革命防衛隊などをなだめるために掲げた、うつろな「目標」なのであるうか。

平和への復帰が一日も早からんことを、百万人余の死者を出したと推定されているイラン、イラク両国民のために祈るものだが、ホメイニ声明を読んで、筆者は日本国憲法を思いだした。

「信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない」（第二〇条）

イスラムを国教とし、国全体が一個の宗教団体として政治行動を行つてゐるイランの方は、日本でなら、憲法違反である。言いかえれば、わが国は、イランのような事態

が起ることのないように、憲法が保障しているのだ。

交戦相手のイラクもイスラム教徒の圧倒的に多い国だが、ほかにキリスト教徒やアルメニア教徒などがいて、さらにそれぞれいろいろな宗派にわかれている。だから、イラクは、政教分離を国是としている。それが現在のイランからみれば、堕落と映り、「聖戦」の対象になるのだろう。イランがこの泥沼戦争の苦い体験から学んで、政教分離の方向を取るのが、歴史の流れからみて、進歩だと思うのだが。

もう一つ、イ・イ戦争での各国の武器売り込み競争について。スウェーデンのストックホル国際平和研究所の報告によれば、イラン・イラク両国に、武器を売り、支援を行つた国は、国連常任理事国の中英仏ソを先頭に二十八カ国にのぼる。これらの国々が、国連の場では、イ・イ戦争を早く終わらせるために

話しあいをし、決議をしてきた、というのは、
どうにもスッキリしない話だ。

「正義と秩序を基調とする国際平和を誠

実に希求し、國權の發動たる職争（を）……
永久に放棄」（憲法第九条）した日本は、もち
ろん武器輸出はしていない。
こういう立場のわが国であるから、和平の
促進・戦後復興協力に積極的な姿勢を期待し
たい。

十一月 定期講演会の(1)案内
(忘年会)

〔日時〕十一月一日（月）十八時より

〔会場〕三笠会館本店 六階「高千穂」

○三一三五七一一八一八一

〔講師〕

エコノミスト

五十嵐 敬喜氏

（88・7・23）

三菱UFJリサーチ &

コンサルティング（株）

執行役員調査本部長

「母のひと言」

ランコ岩本

(米国ジャーナリスト)

年末である。もう直ぐ新年となる。この

人生の節目の時、国籍を問わず、人はみな、
越し方を振り返り、色々思うのではないだ
ろうか？

私の想いは矢張り「日本」にはせり、家
族や友人、知人のこと、彼らと共有した体
験を振り返ることが多い。年を重ねること
に、両親と過した子供時代のことを懐かし
く振り返ることが多くなるようだ。

今と違つて当時は時間がゆつたりと流れ
ていた時代だつた。日本の「母」たちは専
業主婦で子供が帰宅すると家にいて、子供

との会話がはずんだ時代だつた。私も学校
から帰るとその日の出来事を母に話すのが
習慣となつていて。今になつて気付くのは、
母が聞き上手で何でも面白がつて聞いてく
れしたこと。そして時々何気なく母が言つた
「ひと言」が、私のその後の人生で貴重な
指針となつていることである。

小学校の3年生頃だつたと思うが、学校
からの帰り道、3本していったヘアピンの1
本が途中で抜けて無くなつていたことに帰
宅して気付き、その事を母に言つたら、「可
哀想に、今頃寂しがつて泣いているでしょ
う」と母が言つた。その途端、私は引き返
して、無くしたヘアピンを探したい気持ち
に駆られたことを思い出す。

このひと言で、日本の伝統的「森羅万象」、
全てのものには「生命あり」の思考が私の中
で全く自然に育つことになつたと思う。

さてここで話は数十年後の2000年辺りのアメリカに飛ぶ。

或る朝プールで毎朝顔を合わすので親しくなったエステルさんが、サウナ室に入ってきて、やれやれという感じで、「やつといかれた水泳着を捨てた！」と言つた。

途端に私の口から、「その水泳着に感謝したの？」という言葉が飛び出した。彼女は勿論「？」で怪訝な顔。幾つになつても茶目気の抜けない私は、サウナ室の外のゴミ箱に捨てたばかりと知るや、彼女の手を取つて「なんだなんだ」と訝しがる彼女をそこに連れていき、「ねえ日本では、針供養とか、使つたモノに『尽くしてくれて有難う』と感謝してから捨てる習慣があるのよ」と言つた。

するとエステルさんはゴミ箱の前で、両手を合わせて、「サンキュー、サンキュー」とお辞儀をし、私達二人は大笑いとなつた。

数日後、彼女がプールの中で私に言つた。
「あの話はとても良かつたから、娘と孫たちに言つたのよ・・・」

エステルさんは多分70代後半で、娘が2人でディーンエージャーの孫娘が2人いる。でも茶目氣たっぷりな人で、私と日本レストランにディナーに行く日には、友達との電話や会話で、「I'm going to Japan tonight」(今夜「日本」に行く)とやり、「すると決まって『おやまあそう? 何時の飛行機?』とみな訊くのよ」と笑う。

お互に、幾つになつても茶目気の抜けない人間だから、仲良しなつたのだろう。今では相互に extended family、姉妹みたいな気分である。

「感謝祭」

ないだろうか。

なんというけたたましい世の中となつたことだろう。

これまでクリスマスのセールスは、感謝祭（今年は十一月二十二日の木曜日）の翌日の金曜日（ブラック・フライデー）に開始されるのが常だったが、今年は大型店が軒並みそのスケジュールを前倒しし、感謝祭の日の午後八時や九時にセールスを開始すると発表した。

これでは、家族・友人が集まって、年に一回やつて来る「感謝する日」の意味合いも薄れてしまいそうでだ。東芝の40インチICDテレビが、240ドル値引きされ179ドルで買えるとなると、「八時開店だから、五時には店の前行つて並ばなくつちや」という心境になつて、感謝に満ちた話題や会話どころでは無くなるのでは

同様の懸念からか、ウォール・ストリート・ジャーナル紙（WSJ）のコラムニストのP・ヌーナン女氏が、知人友人に「あなたは何を最も感謝したか」と訊いて、みなの返答を十一月二十四～二十五日のWSJに取り上げている。

それによると、殆どのアメリカ人がその日、眞面目に感謝したことが伝わってくる。

みなが真っ先に挙げたのは、矢張り「家族と友人」で、「みなが健康であること」に感謝。続いて「選挙が終つたこと」に感謝、そして「アメリカ」に感謝。

具体例を引用してみよう。

サンディ被害者が取り立てて感謝したのは、「生きていてハッピーであること」「12日間泊めてくれた友人（頭上に屋

根があること）」「只でガソリンをくれた州兵軍人」「電気」「友人の子供たち

（友人を辛抱強くさせ、私達大人の気分を転換してくれた）」

その他としては、「退屈しない人生であること」（弁護士）「政治劇がまるでカフエインを提供してくれたようで、コーヒーを飲まずにすんだこと」「誰かは知らないが、テキスト・メッセージを発明した人」「知らぬ間にいついてしまった野良猫の Buddy the Cat」

大統領選挙の結果に関係なく、アメリカ人はみな選挙が済んでほっとした模様だ。そして、世界一の「権力と権威」の

座を公に戦い、暴動化することもなく、平和裏に、有権者が時には十時間も並んで投票した「アメリカ」という国を誇りに思い、感謝の念を再確認した模様である。

これを書きながら私が思うのは、「あなたが今、最も感謝していることは何ですか」と日本人に問うたら、どんな返答となるだろう、ということ。

昭經俳壇

三郎

剣太郎

百日紅廊の窓の女の影

伊豆七島四つまで見え天の川

新茶売る乙女が二人宇治の里

彼岸花母逝しませし今年はも

陽の注ぐ宇治の山端の新茶かな

内股に歩む女形や秋羽織

与一漬異国に永き子の土産に

ある月夜ブランコ勝手に動き出す

ラクロスの棒もち乙女ら今朝の秋

月明かり自由の女神を娘と二人

秋時雨警笛一声靈柩車

稻妻の一閃闇夜に摩天楼

緑台の王手飛車取り今朝の秋

悟 風

京 子

錢湯の富士山晴れて文化の日

木曽節のとどき木曽路の谷紅葉

吊し柿軒先すぐに天龍川

村中の田畑が見ゆる吊し柿

いつ見てもふるさとの山眠りをり

蓮根掘る手の幸せの泥だらけ

短日の柱時計の振子かな

駅前の街灯ともる日短か

サムライの古都鎌倉の七五三

耳遠し言葉少なく囂栗坊主
けし

福知山晴れゆき稻の花ざかり

莢けしや席ゆづりくれ異国人

ひたすらにひたすらに咲く百日紅

ゆきあいの雲の流れも葉月かな
(夏の雲と秋の雲がまじっている)

刻々とむすび解けゆく秋の雲

初秋や青く伸びゆく芒の穂

発心のゆらぐ時あり翻雲

スカイツリー秋碧天へつきささり

H・ドッペル
フェルト

嘘のよう浜ひるがおに目もくれず

すすきの穂二ヶ月待てば髭将軍

どんぐり

白萩の聞こゆ境内碧し

台風の三角波の漁船揺れ

珍しや山下清の夏の富士
雲海に浮ぶ小島の槍ヶ岳

せみしぐれまどろみ日覚め陽は西に

八月にまさかの収穫早場米

草笛や雲井遙かに目を据ゑて
夏山や悠然と飛ぶ鷹たか一羽

彼岸花田の岬に咲き漁火か

青年の夢もはかなしねじり草

淡紅色浜ひるがおは風に揺れ

若者の死の慌ただし走馬燈

経説と線香のにおいに彼岸暮れ

山人

やまなみも紅葉に遠しみどり濃し

昼餉どき妻黙々と胡瓜もみ

青蛙湯窓に二匹はりつぎて

秋刀魚焼く女のにがみの身にしみて

落日や日差し尾を引くお花畠

芋を擂る定年退職自由の身

冷や麦のギャマン皿のひんやりと

富貴男

秋の空慈母觀音かや至仏山

雲海のうねりに押さる山の峯

秋高し峰目交ひに伊那の里

雷光に浮ぶ比叡の山の夏

長谷川

中年の見合ひつつまし新茶つぐ

月出れば闇夜に映ゆる月見草

夾竹桃老人ホームの高笑ひ

東大寺への道のり遙か月見草

雷鳴や伊那の谷底どよもせる

百日紅注射の痕の点々と

睡蓮や昔のままのモネの家

人並みの暮らしの庭の日照草

後記隨想

佐々木誠吾

異常氣象の夏の到来

八月、季節は炎暑の真夏に突入である。裸かになつていても暑いし、ステテコ、クレープシャツになつても暑いし、手の付けようがない。風車や、太陽光発電まで使って、徹底した節電の夏である。クーラーをやたらに使ふこともばかるし、クーラーに当たりきりも良くないし、冷氣を以て矢鱈に体を冷やすのも健康上良くない。素朴で古風な趣味かもしれないが、実現性が高ければこれに越してみた。

一番いいのは蛙みたいに適度な温度の水に浸かっているのがいいのかもしれないが、

家ではそうもいかない。河童みたいに水を浸した皿を頭に載せていたからと言つて、効くものでもない。庭に樽を出して水を入れ、日傘を立てて入つているのもよいが、しかしこれもじわじわと体を冷やすだけで健康的にも良くないし、第一、清涼感が味わえない。一風呂浴びてビールを飲みながら、軒下に藪簾を立てて、風のそよぎを感じている方が気持ちいいだろう。風鈴の音も、時に涼しさがあつて、さわやかな風情が加わつてくる。風のない時は、かき氷を口に入れて、氷嚢を頭に似せて、うちわで煽いでいればいい。自家発電だから、これには電気代がかからないう。無論贅沢にホテルやアスレチックのサウナに入つて思いきり汗を流した後なら、尚、爽快感を味わえるかもしれない。サウナ付の自宅か。そんな条件を満たすような家だと、

引き戸もないから葭簾は張れないだろう。ああした近代的な場所は気密性があつて、空気調整をしている。密閉された部屋であるがゆえに、電気が止まつたら最悪である。我が家は幸い引き戸で外との連絡がついているから、そんな心配は必要ない。

そんなことを白日夢のごとく夢を見て、縁側に寝転んでいたら、上品な家の声がした。「そんなところでなにしているんですか、蚊にさされますよ」と云つて蚊取り線香を持つてきてくれた。やることがクラシックである。決してエステティクとは言えない。氷嚢をおでこに置いて、ステテコ姿でころがつている旦那を起こそうともせず、そのまんま寝こんでいろと云わんばかりである。もしかすると、蝉の声を聞かせておいてやろうといふ配慮かもしれない。せつかくいい気持ちで

仮眠をとっているのに、特別用もないのに起こすこともない。うたた寝はいい気持である。スイカを持ってきましたよと言われたぐらいいでは、起きようともしないだろう。そもそも億劫だと、小生もうたた寝をゆうせんしているので、先を見越した賢明な家の行動である。折しも木の幹にへばりついた油蝉が突然、鳴き出した。久しぶりに聞いた蝉の声である。別に来客があるわけでもない。こんな時に訪ねてくる客人は、無駄な客に決まっている。

葭簾に囲まれた縁側から、氷嚢を持ったまま八疊の間に移動して、畳の上に大の字になっていた。焦点が合わないまま、ぼんやりと天井の杉板の渋い木目を眺めていた。むくの杉板の木目を見ていたら、自分が木にとまつて、一心不乱に鳴いている蝉のような気がし

てきた。僅かな移動距離だが、ステテコ姿の

身軽さが幸いして、畳の艶めかしい感触が豊かな想像力を芽生えさせてくれる。こんな夢

想にふけりながら、筆を流して馬鹿くさい小説を書いていけば、直木賞だつて、芥川賞だつていくらだつてとれると思つた。しかしあんなものに憑りつかれて小説を書いたりしている奴は、馬鹿者だと思った。商業主義に振り回されて欲につかり、ろくなものは書けない。そもそも発想がいけない。物を書いて金を儲けようとする連中には、ろくなものがいない。変わり者で、躁鬱両極性の、軽度の精神異常者である。夢想気味に奇想天外なことを考えていると、緊張しきつた日常の思考のガス抜きになつて、マッサージ師に体をもみほぐされている快い感じがしてきた。

留守番

家内が今日から二泊三日の旅行に出かけた。神の教会の女性会の全国大会が、伊豆の天城山荘で開かれる。毎年の行事だが、家内は全国女性連盟の会長を務めている。敬虔なクリスチヤンである。神様との対話の時間が長く、静かに暮らしている類の人間である。クリスチヤンであつても祈りを忘れて、活動的になつている人もいる。奉仕と戦況に努めて、まるで牧師以上に神の教えに従つて布教活動に努めている人たちである。昨日聞いたところによると、女性連盟の会長さんを、八年間もやつているそうである。今回のように勉強会や、祈祷会などが重なつて、夏の修養会だから仕方がないが、敬虔なクリスチヤンだから、その資格は十分備えているとは思うが、何で八年間も務めているんだと聞いたら、

いつの間にか経つてしまつて、気が付いたら八年だというのである。一期四年の任期だそうで、二期目を務めたので、三期目は誰かにやつてもらおうと思つてゐるというのである。それであとを誰かやつてくれる人がいるのかと云つたら、それがいなから困つてゐるものという。

信仰の世界も、人々の集まりとなると、柔軟性を以てカバーする、一種の世俗的な考え方を以て望むことだつてあらう。硬直されたものだと、勤まらない話だつてある。上に立つ人の雅量が試されてくる。そうした時は私心を捨てて神様と語り合つて、そのための瞑想の時間も必要となつてくる。明鏡止水、困難な課題に立ち向かつたとき、政治家がよく使う修行の道である。これにはいさか邪念が含まれていて、次の打つべき一手を考えて

政局に臨む姿勢をとることなのかも知れない。座禅を組み時もそのための訓練である。

政治家は別として、人間、世間では皆が、そんなものかもしれないと思つた。自分だってそうかもしれない、今まで気づかなかつたことだが、引き際が肝心だとは思つて遠慮しても、いざとなると傍でそうさせてくれないのが、世の常であり、しがらみでもある。要は緩急自在で、事に臨むべしで、これも政治家は別として、つまりはなるようほつとけということだろう。聖書で実践生活の中で教えとなる強烈な言葉がある。ローマ人への手紙に出てくるパウロの言つた言葉の一説である。頭に入れやすいので簡単に打ち込んであるが、いざ実践となるとこれほど厳しい文句はない。曰く、難難は忍耐を呼び、忍耐は練達を呼び、練達は希望につながるという

ことである。やつてみろと言われたら、そう

迷い

簡単なものではない。歌人で早稲田大学の名誉教授はあるとき、忍耐は練達を生じ練達は希望を生ずわかれかく信すと一首を詠みあげている。艱難辛苦に出会ったとき、人間はいかなる姿勢を以て対応すべきか、いかなる人生観を以て望むべきかを説いている。植田先生は艱難の言葉を外しているが、いうべくして当たり前のこととしているのであろう。人生は艱難の道は当たり前のこととしてとらえているのである。精神的苦悩に、肉体的苦痛に、同じ意味を込めているのである。同時に人間には、もののとらえ方次第で幸福を考えることも可能だと、大きく尺度の幅を持たせているとも考えられる。楽観的、悲観的の解釈の幅である。

選挙に勝つて政治家になれば、よほど悪いことをしない限り、国民の血税を使って安泰に暮らしていく。安泰の中でも少しほは国民のために働くという気持ちがあるので当然である。人間には良心というものがある。古い言葉だが、滅私奉公というものが政治家にないと、選んだ国民は苦労しなければならない。欲の突つ張つた人間が政治の世界にかかるると利権がらみの政治家ができてしまつて、金集めに狂奔し、蓄財に走り出す。やがて落馬するものが出てきて、周辺を取り囲んで物議をかもし、はては県議の野々村さんみたいな醜態を演じることになってしまふ。自らまいた種ばかりではない。周りからの誘惑に負けたり乗つたりしないこと、信念堅持であつてほしいものである。一般庶民は、常

に勤勉実直の道を歩んで、そろばんを片手に考えながら行動している。孔子ではないが、吾一日に三省し、自分に誤った行動をしなかつたかと常に厳しい道を突き付けられる。

自分の仕事を終えて今夜は、ひとり酒でもあおつて帰るとするかと思っていたら、昨日も今日も、おどといも、月末にあって、商談と付き合いで午前様続きである。これでは身体がもたない。眞面目に早く帰宅しようと思つたら、机の電話が鳴つた。申し訳ないが、これには出ないことにして、七時過ぎにオフィスを出ることにして、家に帰るつもりである。七月は忙しく大いに働いたので、家内がないが、風呂に入つてソーメンでも茹でてさつぱり夕食を済ますつもりである。ワイワイ二十四時間風呂を使つてるので、好きな

時にいつでも入れる。所帯を持つた若い時に、アパート暮らしをした。狭い風呂とトイレには散々いやな思いをしたので、そこで大きな教訓を得た。毎日の暮らしに必要な風呂とトイレだけはゆつたりとしたものに作りたいと思って、それが普請のときの夢でもあつた。佐々木さんのうちは家が開放的で明るいといわれるゆえんは、大きな窓がたくさんあることである。外の光と風を十分に取りたいというのが、理想である。しかも両方とも天然の恵みを凝縮したもので、コストゼロである。ビルのつまみに尾山台駅前のマーケットで、焼き鳥を買って帰ろうと思っているタクシーには乗らずに、地下鉄に乗つて帰ることにした。月がとつても青いから遠回りしさつぱり夕食を済ますつもりである。ワイワイ帰ろう。

都会の盆踊り

翌日のこと、仕事を終えてオフィスを出たら、何やら空の雲行きが怪しく見えた。昼間の真夏のカンカン照りで、夕方になればいつ夕立が降つても不思議ではない。プランタン通りを銀座の四丁目交差点に向けて歩いていたら、きれいな声に呼び止められた。ふと見たら、昨夜寄つて軽く飲んでいった店の子である。昨日は七月の晦日である。運に向いて、気がかりだった仕事が三つ、どうしても片付けて行かないと、重大な岐路に立たされかねないものであつた。それを我ながら見事に成し遂げて目安がついた後だつたので、一人祝い酒を楽しむかと思つて、しばらく不義理をしている店に立ち寄つていこうと思つた。気持ちの優しい感じの良い子なので、飲みに行つた時はいつも席に呼んで付き

合つてもらつてゐる。しかし体のこともあつたので思いとどまり、近くのルノワールによつて、コーヒーを飲みながら、ペンをとつて、ざら紙に和歌を詠み始めた。これを始めるとどまるところを知らない。趣向が昂じてくると、やはり一杯飲んでから帰るとしようかという気になつた。軽く鰻のきく川にいつて一杯飲んだ後、不義理をしている店に行こうと思つた。だがこれが引き金になつて今晩も午前様になつたりしては、天城山で神の子として奉仕している家内に申し訳ないと思つて、最初の店で軽く付き合つて店を出た。ボツリと降つてきた雨の一滴が、帰路を急がせたのかもしれない。

自由が丘駅によりてタクシーに乗つて帰ろうと思つたら、駅前広場は今夜から盆踊り大会が催されていた。銀座では崩れそつな空

模様だったが何とか持ちこたえて、お盆の踊りの夜を過ごせそうである。櫓(やぐら)が二つ建てられて、踊りの大きな輪が二つ出来て、騙されて輪に入った人たちの踊りを競い合わせる形である。小さい婆々もいれば、きれいな主婦もいて色気はさまざまである。ばあさんが尺取虫みたいに前に進んでいく後に、若者が心配そうについて踊っている。あれはきっと孫に違いない。ばあさんは小さいころから踊りを習っていたのだろう。「雀百まで踊り忘れず」を地で行くようなものである。踊りは若ければいいというものでもない。踊りの身ぶりに、そこはかとなく発散する色気が何とも言えない。そのあたりの演出が必要である。女子大を出ていなくてもいい。女性は角ばつたものでなく、ほんのりとした丸みがいい。学歴ではなく、身に備えた色氣である。

ある。教養とか人柄とでも云うべきだろう。櫓はいつも一つしかないが、今年は気前よく二つも立てられて、例年になくにぎやかである。踊る人たちと、これを見る人たちが、約半々である。踊る人たちが例年に比べると多くなっている感じである。これもまたアベノミクスのおかげである。

その安倍さんは今、中南米諸国を歴訪中である。そして豊富な資源を背景として発展する勢いの、中南米諸国と経済連携を深めるべく、奮闘している。中小企業も含めた経済界の一大デレグーションを編成して、自らトッピセールスを行って、日本国の経済の売り込みに懸命である。おかげでブラジルでは地下鉄の受注に成功したりして、その全受注量も大きく貢献している。立派なものである。盆踊りに例えれば、安倍さんはさしづめ櫓に

上つて、手振り足ぶり格好よく踊つている最中である。安倍さんには不思議と男らしい色氣というものがあつて、これが得をしている。色氣は女の独占するものではない。男にだって色氣のある人とそうでない人とは、格段の魅力の差が出て来るだろう。してみると色氣はある種備わった品格であり、教養ともいふべきかもしれない。

昔、首相になつた大平さんがいたが、大平さんが櫓に上つて踊り出したら、櫓が崩れてしまうだろう。田中角栄はと言つたら、力士みたいに力がこもつて威勢がいいが、踊りに威勢は必要ない。その点、角栄は田舎丸だしである。踊りとは程遠く、たる神輿でも担いでいた方が様になる。

安倍さんは日本の長いデフレ経済からの脱却は、尚完全とは言えないが、経済の回復

は顕著に始まつており、これを全国津々浦々にまで広めていかねばならないと強調している。確かにそうであるが、ここ自由が丘の盆踊り大会では、景気の回復を反映してか、踊る舞台の櫓も増えて、踊る人たちも増えて、これは正しく安倍さんのおかげである。景気を良くするにはお金を振る舞えば、使う人も増えて景気は上向きになる。俗っぽい話になつて恐縮だが、判り切つたことが出来なかつた今までの政治家、とりわけ総理大臣は馬鹿者の中くでなしであつた。ろくでなしに国民は税金をあてがう必要はない。どこかの県議の野々村さんではないが、あんな奴みたいのが政治家に成りすまして税金をかすめているのである。志高く、懸命になつて実行している安倍さんに、敬意を表したいが、はしやぎすぎて事につまずくことのないよう祈

つてゐるところである。九月には内閣改造を実行したいとのことである。強力な布陣を敷き、まちがいのないように政権運営を図つていつもらいたい。目標は国民の平和と繁栄である。

踊つていらる人は大体が女性である。浴衣を着た女性が多かつた。若くてよっぽどきれいな人でもない限り、自分の目が惹かれることはないが、今年は稀に見る美人の品評会のような感じで、踊りの輪に目を奪われてしまつた。踊りの輪が混雑せず、しかも大きく広がつてゐるので、そうした人を見つけやすい状況かも知れないが、これで行くと盆踊りが数倍楽しくなつてきて、見飽きないでいる。そうした中で若いサラリーマンと思しき男性と、二十歳前後でジーンズをはいた若者が踊っているのが印象的であつた。一見してぎこ

ちなく、下手くそな踊り方がユーモラスで、滑稽である。踊りが得意でもないのは素人でもすぐにわかるし、踊りたい理由もわからぬが、衝動的に踊りの輪に飛び込んだのかもしれない。前方、左右の人の踊り方を見ながら、しきりに真似ようとして踊つている。文字通り、手振り身振りの格好である。それにしても勇気のある人だと思いながら、感心して見ていた。若くて、綺麗な人は、踊りも上手である。陶酔しきつた感じで踊つている。こちらも陶酔しきつて踊りを見ている。どこのどうゆう人かしれないが、息が合うということは、こうした心境かも知れない。

この一週間、忙しくして休む暇がなかつた。心身ともに疲れ果てたが、無駄がなく仕事をやり遂げて満足であつた。実つて終えた件もあつたし、種をまいて芽が出てきたのを確認

した件もあつてさまざまだが、大きな仕事を成し遂げた自信は十分にある。来週は事情があつて一週間の休暇を取つてある。私自身の、その間の仕事はプランクである。タクシーを拾つて家について、玄関に入つたら電話が鳴つていた。出たら家内からの電話であつた。これから飯を食う、自由が丘で盆踊りを見ていたと云つたら、笑つていた。そばにいた仲間の松本さんにも云つたらしく、笑い声が重なつて聞こえてきた。

八月二日

八月に入つたら一週間の休養と思つて、七月末に大方の仕事を片付けて臨んだが、その重圧から完全に抜け出たわけではなかつた。多少引きずつたまま健康診断を兼ね、K大学病院に入院、かねてから懸案だつた疾患を除

去するに成功し、今日無事に家に戻つた。何事につけ欠陥、欠点はすべからく善処するに越したことはない。油断すると状況を悪化させて、後で取り返しのつかない事態になり得ることだつてある。五十歩、百歩ではない。この時の一步は、千歩に勝るものである。

たとえは辛辣で、あまり好ましいものではないが、世間でよく言われていることがある。人間浮き沈みの世の中だが、そこにも人の一生が運によつて大きく左右される場合がある。否、むしろ運が大きく左右して、本人がそれに気づいていない場合が実際には多いのである。だから今まで多くの先人たちが、我々に多くの處世術を以て戒めている所以がある。傲慢に至らずに、謙虚になつてみずからを反省して、先に生きる姿勢が求められるわけである。意味合いは多少違うかもしれ

ないが、孔子が説くように、毎日を以て三度、自らを反省して、誤りなきを以て「一日を過ご」したかと、厳しく自問自答している。

これを各人各様に当てはめてみると面白い。思索、行動においても然り、自分の動作の俊敏さ、遅滞さを測定しながら、自らの心身の健康状態を認識することができる。何かに気付いた時には、しかるべき対応することが肝心である。こうしたこととは、自分だけに関するものではなく、他人に対しても取るべき友情であり、思いやりの一つではないだろうか。妻が夫の状態に気付いて取る愛情と同じように、夫も妻に気遣ういたわりの大いなる氣概ともいうべきか。偉そうなことをおくびもなく、云い抜かして、これは失礼仕るが。しかしよくよく考えてみると、男の行動と云うものはおおむねこうした氣概の上に立つ

て成し遂げている仕事は、全て皆うまくいつているようだ。こうした思いの一片すらうかがえないようなおっさんの仕事と云うのは、自分本位の傲慢さがあつて、大小に限らず必ず失敗している。神様はいつどこからでも、ちゃんと見ていらっしゃるとは、昔親父が云つていたことであつた。小出しにして云うわけではないが、今回、私は運よく夏の休暇に合わせて、自分が堆積してきた汚物らしきものを取り除いて、名医にかなつて帰宅することができたのも、一つの天命だと思つて感謝している。堆積した汚物と云つても、悪名代官が仕様三昧のこととしたようなものではなく、その間、自分の心と向き合う時間を与えられて、なお研鑽努力を顧みる機会を与えてくれたという、控えめで甲斐甲斐しいものである。これでまた私なりに奮起努力し

て、艱難辛苦に立ち向かっていく情熱を持つことができたと思つてはいる。肉体の、わけても五臓六腑の一部の悪いところを除去したが故である。

心境は、小金井カントリークラブで、最終ラウンド、やつとのことでグリーンに乗せた私は、十五ヤードの長いパターを見事に沈めたあの時と同じである。直線コースを進めてからゆるやかなカーブを切つてそのままホールに沈めた。ベテランの手塚印刷の手塚社長と一緒に組んで回つていたが、それを見ていた彼は私に対し、正にプロ級だと褒めあげてくれたが、その意味が分からなかつたら、純情無垢さを、懐かしく思い出している。たまたま奇跡的に入つたものだが、まさに有終の美を飾る快挙だと常に思つており、そうした思いを胸に抱いて、いつも奪還して

いきたいものである。あれを最後に私は、そもそも下手なゴルフをやめてしまった。

八月一三日

暴れた台風

お盆休みで帰省客の帰郷が始まるというのに、天候がはつきりせずに荒れ模様が続いている。沖縄を暴風圏に置いた台風一〇号が、南側に大量の雨雲をもたらして朝鮮半島に上陸して行つたのはそれとして、そのために九州、四国、中国地方に歴史的大雨をもたらし、河川の氾濫と家屋の浸水、土砂災害を多くもたらして、甚大な被害となつた。今度は後続の台風十一号が沖縄南沖を北上、本邦を狙う形で大きく成長した。この台風も気圧配置の関係で、右側に大きく雨雲をかかえながら領域を広げ、結局四国に上陸した。それまでにも大量の雨をもたらして三重や和

歌山ではかつてない降雨量となつて、全域に特別警戒注意報をだして住民に避難命令を出した。三重県では千三百ミリを超す降雨量となつて全地が水浸しである。

今年の台風の特徴は、太平洋側に高気圧が大きく張り出しており、台風の北上に伴つて、その間を南から湿つた暖かい空気が大量に流れ込んでくるため、分厚い雨雲が形成されやすい。この精力的で活発な雨雲が、各地に大量の雨をもたらして災害を発生させていく。この間交通機関も混乱し、ダイヤが乱れ、多くの人が足止めを食う結果になつた。

子供たちの夏休みも台無しである。うちの

孫の佳ちゃんと麗ちゃんも、三重県のさる富豪の家に一週間の予定で遊びに行くつもりで羽田まで行つたが、全便欠航で致し方なく引き返してきたという。敷地を流れる川で遊

んだり、山に登つたりできるそだだから、そのおうちには、大層な大地主で山持ちの人達いない。だとしたら浩然の氣を養うべく、ぜひともご厄介になつて精一杯遊んでくるといいと期待していたら、翌日のつかの間の天気の回復を掴んで、再び羽田から出航した飛行機にちやつかり乗つて三重に向かつていったそうである。宅地内に山があつたり、川が流れたりしている場所だから、広大な敷地の中を終日駆け回つていたつて飽きることはない。ハイキングに出向くような場所のようなものだから、大雨のあとに気を付けなければいけない。

三重の白浜と云えば、昔、新婚旅行に選んだ場所であった。四泊五日の楽しい旅であつた。何もかもが珍しく映り、珍道中であつた。白浜の海岸で、好物のアワビの壺焼きを一人

で食い過ぎて、腹痛を通り越し、半日も下痢に悩まされた。幸いにも医者にかかることもなく自然治癒を試みて、白浜の海岸を気持ちよくかけていたら、しばらくして不思議なくらいに改善してくれたことを思い出して苦笑したりしている。思いでのアルバムをひらけば仔細に楽しいことが沢山出てくるし、思い出の和歌も泉の音ごとく詠まれてみずみずしく回顧することができるだろう。その白浜の海岸を、今、孫の佳と麗が嬉々として飛び回っていることを思うと、感慨無量である。同時に何となく時間の過ぎ去っていることに慌ててしまうような心境である。懐旧の念に浸るわけではないが、万人に共通する心情ではないだろうか。それがこれからに勤労と希望への一里塚となれば云うことはない。

巷ではお盆を迎えて故郷へ帰る人たちで

いっぱいだったが、騒がしかつた時間が過ぎて、何時の間にか世の中が閑散として、時間が停止してしまったような錯覚である。お盆は、日本の季節の巡りの中に、昔から育まれてきた行事の中の大きな意味合いを持つてゐるが、お正月とは変わった過ごし方と趣きがある。それは先祖の御苦勞に対する尊崇の念を自らの胸に呼び起すことであり、故人となつた身内のものはもとより、親しき縁を以て故人となられた人たちを静かな気持ちになつて弔う意味でもある。そうした思いを以て、極暑を避けてのこの時を、清涼な緑陰のもとで心身を癒す休暇を楽しみたいものである。これは日頃、無沙汰に過ぎる私たちを慈しみ、先祖が私たちに用意してくださつた大いなる思いと恩恵のたまものである。

終戦記念日

天皇の戦争終結の放送にひまわりの咲く
袋田駅頭

激動の昭和のみ代の天皇の苦悩をつづる昭
和実録

終戦記念日と云つても意味合いは、敗戦によつて日本が自ら連合軍に無条件降伏を受けて入れて、今日の自由と平和と民主と繁栄を勝ち得た日を、戦争の反省と不戦の誓いをして、将来の道筋を獲得した日として思い起す日である。不戦の誓いとは、相手に戦争を仕掛けないことであつて、自らの主権、即ち国と国民の平和的生存の権利を放棄するものではない。そのための準備は、英知を以て

私は、今まで昭和経済を通じて長い間、終戦、敗戦のこの日の意義を私なりに世間に訴

備えておかなければならぬ。当然なことである。しかも、世の中があの時から既に大きく変化を遂げ、國同士が以前のように、たやすく戦争を遂行していく状況ではなくなってきた。一国の戦争行為は、相手から同じような、それ以上の反撃を食らつて双方が自滅の道を歩むことであり、決して得をする手段はない。共存共栄がいかに重要になつてしまふかと云う、歴史的、時代的状況の変化がもたらした、明らかな結果である。ましてや核兵器の使用は不可能である。核兵器の攻撃に対する対策としては、さらに強力な核兵器の反撃を以て、双方にとつて破滅しかない。危機意識が高まつて今は世界的にも、そうした抑止力が完璧に近く構築されてきた。

えてきた。その気持ちは依然として変わることがない。そしてそのことは普遍的真実であり、戦争がいかに人類にとって罪悪であり、大犯罪を犯すものであり、冷酷無残で、反人間的であり、ヒューマニズム精神に反するものであるかを訴えてきたつもりである。私にとってそのことは最早、議論の余地すらない、神を冒涜する行為であることは、古今東西戒めの言葉として決めてかかることができる。人間にとつて自由と平和と民主と云う理念ほど崇高なものはない。それは云わざして、人間の尊厳性を示し、謔い上げるものである。これを犯す輩は、惡魔的存在であつて、少なくとも人間として資格を有する者でないことは確かである。馬鹿な人間がひとたび権力の座に就くと、結果がいかに悲惨であるかと云うことは、如実である。

太平洋戦争によつて多くの痛ましい犠牲者を出した悲劇は、身近に経験して、自らも少なからず戦争の実態に向き合つてきた。敗戦の色濃くなつてきた昭和十八年半ばごろから、国民小学校の学童疎開が始まつた。集団疎開、縁故疎開の二者選択を強いられ、空襲の被害から逃れるために都會から日本各地に移つていつた。例えは私は病弱だったがゆえに小学校二年の春、縁故疎開で水戸に移つていつた。水戸ではいろいろな事情で各小学校を転々とし、ゆつくりと勉強した記憶は全くない。学童疎開と云う名目で、子どもたちや女子高齢者が都会を追われ住みなれぬ僻地に移されていつたが、いわば難民である。何百万人と云う難民が発生したのも同様である。私の場合は兄弟四人が散りじりになりながらも水戸を中心に転々とし、すさまじい

食糧難の毎日であつた。そして戦局の悪化に伴つて空襲と艦砲射撃におののきながら、行く先々を変えて行つたのである。

昭和二十年三月十日の東京大空襲は、疎開先の水戸からもすさまじく映つた。空のほぼ半分が真っ赤な火に包まれて、遠く百キロ離れた水戸から見ていて、今にも火の粉が真上に飛び散つてくるような光景で上空に迫つてきていた。B29の猛爆を受けている、その炎火の下で何十万の民衆が逃げ惑つていたのである。当時、東京の浅草で父がひとり残つて奮闘していたが、迫る火炎に取り巻かれていたたまれず外に出た。すでに累々の焼死体の中を、九死に一生を得て助かつた父からの話は、じつくりと聞くことはできなかつた。ただ言問橋を渡つて向島の牛島神社の防空壕に逃れるまで、橋の上に黒焦げになつて

くすぶり燃える人の上を這はずつてきたという凄惨な一言が全てであつた。近所では一家全滅の場合も少なくなかつた。言語を絶する状況を、生々しく子供に語るそれ以上の勇気を、父は持ち得なかつたのかもしれない。

幸い甚大な被害を受けた我々家族であったが、あらゆる艱難辛苦に耐えながら家族が力を合わせて生き抜いた。しかし終戦間際の八月二日、家族六人が一緒になつて水戸での空襲に遭い、ここでも命からがら難を逃れて、B29の夜間の猛烈な焼夷弾攻撃の火炎の中を逃げ切ることができた。以て神の救いと考える以外に思い当たる節がない。それでも馬鹿な戦争は続けられ、さらに多くの犠牲者をだし、膨大な国益を失いながら、本土決戦、国民は一億総玉碎の思想に駆り立てられていったのである。

八月六日、広島で原子爆弾が投下された。

一瞬の閃光で十四万人が亡くなつた。新型爆弾だと云うという説がひそかに広がつた。八月九目には長崎に原爆が投下されて十万の人人が一瞬にして亡くなつた。一説には水戸に投下する予定で飛来したが、その日の天候が悪かつたため急きよ方向を変えて、長崎を選んで投下したということである。この日は水戸に我々家族が一緒に生活していたのである。

恐怖が日本国中に広がつて、竹槍を持つて本土決戦に臨むどころではなくなつてしまつた。史上最大の悲劇となつて、人類史上最も凄惨な地獄絵図を体験して、結果八月十五日正午、六十九年前の今日、玉音放送を聞いて、戦争が終わつたことを知つた。この戦争で三百五十万人の日本人が亡くなつた。半数近い民間人が殺された。戦地で亡くなつた兵士は

二百四十万人、うち百二十万人近い兵士の遺体は、今以て南方戦地で放置されたままである。多くの国民を苦しめて国策、国益の美名のもとに殺されて、国土を焦土、荒廃に導いたこの戦争から六十九年が過ぎた。思い起ころには余りにも戦慄すぎて語るすべを知らないほどである。そして語れる人もだんだんと高齢化して、そうした機会が少くなつてきただ。

真珠湾の奇襲攻撃で始まつた対米の太平洋戦争では、次第に拡大する戦線を維持できなくなり、戦線は後退する羽目になつてきた。大本営発表は虚偽の情報を以て国民の戦意高揚に狂奔し、祖国一致思想を作り上げていった。虎の尾を踏んだがために、虎の威を買いう結果となつた。起き上がつたアメリカにガダルカナルの攻略をゆるし、サイパンの攻略

をゆるした時点で撤退するべきであつたに
もかかわらず、頗馬な指導者、わけても狂信
的軍人たちは、神国の妄想に盲従的であつた。
サイパンの攻略によつて米国は日本本土の
爆撃範囲を得たことになる。高度一万メート
ルで飛来するB29に対し、わが友軍戦闘機
は迎撃すること能はず、対空砲火も届かなか
つた。編隊を組んで悠々と上空を飛ぶB29
の編隊に、日本の小さな戦闘機が向かつて行
くが、途中で皆撃ち落とされてくるくると、
きりもみしながら落下していくのみであつ
た。実力の差は歴然であつた。

日本の制空権は米国にあつた。さらに硫黄

島では史上最大の激戦となり日本軍は玉碎、
更に戦火は沖縄の攻撃に入してアメリカ
の物量作戦に惨敗したのである。沖縄戦は史
上最大の悲劇的な激戦地であつた。武器弾薬

はないままに飢餓に苦しみながら、最後の力
と試みる肉弾もむなしの悲惨な結末
であった。戦況は本土決戦にと映つていつた。
そうした状況下で我々小学生も举国一致の
もと、容赦なく駆り出されたのである。学徒
動員で特攻隊に出陣した兵士はであるが、戰
場に散つた青年諸君も次第に激増していっ
た。そして女子供も含めて、本土防衛のため
真剣になつて竹槍の訓練に毎日が費やされ
たのである。長兄は少年義勇兵と云つて、勤
労奉仕から戦地に向かうための、その特訓の
毎日であつた。もとよりお国のために死ぬ覚
悟であつた。

記録すべき事実は小説においても沢山あ
るが、兎に角原爆の洗礼を受けて日本の指導
者たちはようやく目が覚めて、これ以上の戦
いは日本を再起不能の亡國の地と化す日を

考るようになつたのである。騙され続けてきた挙句に一億火の玉、本土決戦で木端微塵のそう玉碎を良しとするなど、馬鹿ほど怖いものはないの言葉通りで、狂氣の沙汰である。家の前に防火用水があつて、バケツに砂が用意されてあつて、火を消す大きなはたきがあつて、いざとなつたら竹槍で敵アメリカ兵を打ちのめすなどと考えていた我々も、考えてみればド阿呆で馬鹿丸出しで知恵がなさすぎた。いくら言論統制、情報遮断の社会で好き勝手に餉いならされてきたとはい、洗脳の恐ろしさがここにあつた。軍隊に支配され、犬猫のように民衆が奴隸的隸従を強いられていたといつたにせよ、手出しのできなかつたお上にしても、アメリカのB29に向かつて真剣に考えていたことも滑稽ではなかつたのか。しかもそうして洗脳された国民も又、

早晚、状況の変化を知ることができて一億火の玉総玉碎の妄動にかられずに済むようになつていつたことは、神の導きであり、神の助けであつたとしか言いようがなく、幸いであつた。

アメリカ軍の本土上陸をゆるし、竹やりを持つて迎え撃つと本気で考えて、最後まで戦うつもりでいたが、その前に、あの原発をこの狭い日本に何發も落させて、いつたら全土は墓場と化して、日本人はこの世から消されてしまつていてあらう。その瀬戸際で妄想から抜け出て、國家存亡の危機を回避できたことは幸いであった。今だからこんなことも言えるのであるが、記念すべき日ではないが、我々が得た教訓は、この日を限つて、日本と日本人が、暗黒の地獄の状態から、自由と平和と、更には民主主義を勝ち取ることができ

たという厳然たる事実である。この教訓を如何にしてこれからも永続的に維持していくか、旧態然の、急進的保守層の老いぼれ連中の幻想を排除して、清新にして豊かな理念と発想のもと、大きく変化してきたこれから の国際社会に対応、指導していくかにかかっている。

日本でも最近の傾向的風潮として、特に政治の世界で、国会で旧態然で死にはぐつたそ の老いぼれのくそじじいたちや、一部の眺ね上り分子が、依然として蛆虫のごとく懐古趣味にあって、かつての国体を取り戻そうと妄想中である。紛争の地に好んで入つていこうとする知恵なき亡者である。若者をそそのかして、イラクやシリアやアフガニスタンで殺傷を繰り返している原理主義者の気違いと同じである。日本にもこの種の輩がうじよ

うじよしているから、やりたい奴らをそうち場所に送り込んでやつたほうがいいだろう。若もののなかにも周囲の注意を開かずにつ勝手にそうした場所に飛び込んでいつて、敵方に、あるいは何でもない奴らに捕捉されて消されているのが多い。覆面して銃を持ち、徒党を組んで狼籍を働く無頼漢みたいな連中が数多く紛れ込んでいる。傭兵みたいなものも多い。

日本からもN P O の肩書を持つて単身乗り込んでいく若者や無職となつて突き放された中年が、はつたりと冒険心で飛び込んでいくが、事の是非はいろいろあるが、そもそも無謀である。相手方の関係者らに捕捉され、いろいろと取引の材料にされて、とばつちりを受けたりする国はたまたものではない。ちょうど雨嵐の中を、注意を押し切つて登山

を試み、遭難して山岳救助隊の救助を求めて

くるようなもので、わかりきつた結末を強行

八月十五日

する人騒がせであり、誠に持つて迷惑千万な

話である。宗教的対立で原理主義を掲げ、周

囲構わず武装勢力と称して妄動されると、甚

大な迷惑と被害をこうむるのは武器を持た

ない民衆であろう。加えてそうした武装集団

が残虐極まりない行動を良しとして、無力の

住民を相手に狼藉を働いて、略奪、殺傷の破

壊活動をしている。無駄の多い世の中で枚挙

にいとまなしだが、恒久的な平和を希求する

思索のさなかであるが、そうした単独的行動

を以て、海外の紛争地で仲間入りして、どつ

ちつかずの活躍をするのもよからう。一時的

ガス抜きの効果も考えなくてはならない。

大戦によつて尊い命を奪われた多くの人たちに対し、鎮魂の思いを限りなく示し、こ

の日のために心から祈る次第である。

八月十五日

連日のように報道される広島市北部の、豪

雨による土砂災害は深刻である。記録的、局

地的豪雨が間断なく続き、住宅地を襲つた土

砂崩れで、生き埋めになつて救助が間に合わ

ず、死亡する人たちが想像を超えたものとな

り、いたたまれぬ思いである。異常気象がも

たらした事象には違ひないが、それにしても

目を覆うばかりの光景に愕然たる気持ちで

ある。現場で救出に懸命な消防隊、警察隊、

自衛隊の諸君たちが決死の救助活動を行つ

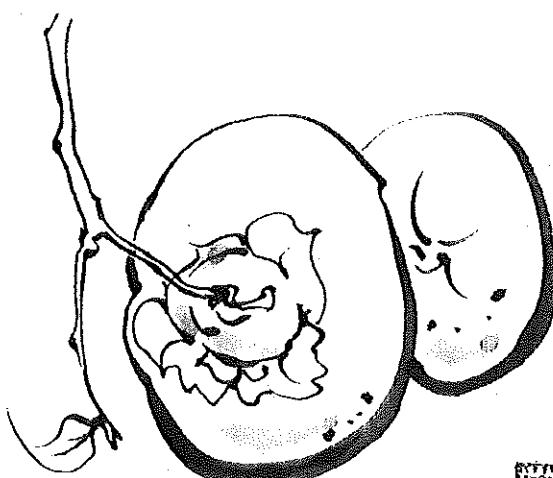
ている。それに加えてボランティアの人たち

も、雨の中危険を冒して活動しているが、二
次災害の危険もあつて忸怩たる思いである。

助かつた母親が、土砂で埋まつた家に向かつて「助けてと、声をあげなさい」と、子供たちに叫んでいる姿が痛ましく、助けてやつてくれ、助かつてくれと祈るばかりである。

不幸なことに死者は五十名を越し、行方不明は三十八名となつて、土砂災害の死者数としては過去にないほどの最も大きな数にのぼつてゐる。災害発生から生存率が急に低下するといわれる七十二時間をまさに、必死の救援活動が続けられているが、非情な雨は断続的に激しく降つて、現場の救出活動を妨げている。一人でも多くの人が土砂の下敷きから救出されることを祈るばかりである。

八月二十二日



作品 関根常雄

無恒産 無恒心

創立は八十周年記念を頭に描いて、たまたま月刊誌・昭和經濟をさかのぼって整理していたところ、かつて日本經濟新聞社の編集局長をし、その後専務をされていた荻原伯永氏が、「恒産無くば恒心無し」と題して巻頭隨筆を書いて下さったときの月刊誌が見つかった。孟子の教えを引用して、いみじく執筆された文章で、内容もさることながら、その麗文に心を打たれた。

日常、荻原専務と呼んで親しくご鞭撻頂いていたが、日本經濟新聞の萬直次社長の紹介で親交を深めたおひとりである。後に日経不動産の専務、広告業の日本經濟社の社長をなされた。荻原伯永氏の寄稿は、四十余年前のことで、小職が昭和經濟会の専務理事に就任したことを激励し、祝う意味もこめて書かれたものである。

引用したところは、孟子の有名な「無恒産無恒心」と紹介したが、たまたま吉田兼好の徒然草百四十二段に、同様のことが書かれていることに気付いて、賢者の思いと教えは普遍性をもつた理念であることを、強く理解したのである。「心なしと見ゆる者も、よき一言はいふものなり。ある荒夷の怖しげなるが、……。されば盜人をいましめ、ひがごとをのみ罪せむよりは、世の人の餓えず寒からぬよに、世をばおこなはましきなり。人恒の産なきは恒の心なし。人極まりて盜みす。世をさまらずして凍餒とうぱのくるしみあらば、とがのもの絶ゆるべからず。人を苦しめ法ををかさしめて、それをつみなはむこと、不便のわざなり。……」

法師が意とするところは、別にあるとして、今までにも何度か読み返してみた記憶はあるものの、此の度、改めて読み返して、おおらかな荻原氏の高邁な理念に心打たれた次第である。

事欠くことのない程度の財産がなければ、人は善心、善行の気持ちも持たなくなる。……」と述べている。国を問わず、時代を問わず、政治がおこなう最低限の目的と使命がここにあるということである。逆に考えるとはつきりしてくるかもしない。つまり人々に善心、善行を持つようには、日々の生活に事欠くような状況ではかなえられないので、然るべき財産なり所得を得られるような社会を作らないと駄目だと云うことである。日々の生活に困つているような状態で、善い行いをするように勧めてみても果たせないのが現実と云うのである。法師は更に付け加えて云う。「……上のお金費す所をやめ、民をなで、農にすすめば、下に利あらむこと疑ひあるべからず……」と。即ち、上に立つ人が贅沢をしたり、無駄遣いをするのをやめて、民を大事にして農耕にいましめさせれば、下々の者に利益が回ること疑いないと申しているわけである。

大隈重信の精神は、社長室に訊ねた時の、萬社長からの最初の土産だった。受付の広い部屋に金子室長がいて温厚な人だった。日経不動産が最初に手掛けた我孫子の分譲地を買ってそこに住んでいらっしゃるが、既に高齢で今どう

独立して間もないころだったの萬社長には友人として小生を引き入れてくださり、若いころの私を引き立てて下さった。ご家族とは親戚以上の付き合いをさせて下さり、何かと勉強にもなった。渡辺幾次郎著、「大隈重信の精神」を下さったのは、大手町の新社屋竣工間もない時であった。この本は実に明治維新前後の日本の外交政策を論じ、そこで大隈重信がどのよう位置を占め、どのような考え方を以て近隣諸国と接し、はたまた欧米諸国と外交問題を開拓していくかが、鮮明に詳述されているのである。後編最後にかけて大隈重信の実生活まで具体的に書かれていて、大変参考になつた次第である。

されているかと思う時がある。萬社長を訪ねて行くと丁重に迎えて案内くださつた。その頃の友達に、針ヶ谷君と、岡本君がいた。二人は、最初の頃の私の事業を側面からサポートして力になつてくれた友人である。その頃、日経不動産の専務をしていたのが荻原さんであつた。萬さんが中興の祖と云われる所以は、新聞事業の近代化を図つたこと、本社を中央区茅場町から現在の大手町に建築移転の大事業を行つたこと、経済新聞としての牙城を築いたことなどがあつて、その業績は真摯で際立つたことにあつた。だから日経不動産の事業も、当時の管理業務から更に営業拡大に舵を向けて行つたことがあつた。その突破口を開いたのが私と、私のサポートを務めていた岡本と針ヶ谷の両君だつた。実は東北線の間々田駅からほど近い所に四方道路に囲まれた地目山林の一万坪強の土地が売りに出た情報を以て一人が見えた。針ヶ谷君は栃木県小山市出身で、地元農家から直接

売却を依頼されたものである。近くに東北道路が出来上がる計画があつたので将来性があるとして、社長に持ちかけた。萬さんはその場で大阪に出張中の荻原専務に電話をかけて、「僕の友人が持つてきてくれたもので、良い土地らしいから検討してみたらどうか」と連絡してくださつた。迅速な判断と対応に、さすがだと感銘した。専務は急ぎよ帰京し、翌日現地に車を飛ばされた。普段はのんびりしていて風格は毛沢東に似ていたので、三人の間では、専務のことを毛さんと呼んでいた。

毛さんを訪ねて話をしていると、面等に向かつて居眠りを始めるのである。ソファーに身を沈めて、時々左右に大きく身体を動かしたりしている。気持ちよさそうである。そこで話を止めざるわけにはいかないので、居眠りをしている毛さんを相手に会話を続けざるを得ない。話を止めてしまうと目を覚ましてしまうからである。変な気配りだが仕方がない。友達の二人を連れ

て土地の説明を行つた時もそうであった。

毛さんがしきりに居眠りをする様子を見て、説明をする友達は大丈夫かと云うので、話を続けてくれと云つたのである。しばらくして専務は目をさまされて「そらか、分かった。それじゃあそれで行こう」と、すべてを聴いて納得したかのごとく返事をされたが、結果は話の漏れているところはなかつた。相手を信用すると漠然としてことを決めにかかる、太っ腹な人だと云うことが判つた。大人の風格、これに勝るものなしと思つた。その時、日経不動産として初めて商売として土地を取得した第一弾だつたそ
うである。その土地はその後値上がりして、必要な時に有効な買い手がついて、必要な資金に充てるべく上手に売却して、利益計上を詰つたのである。この時から日経不動産は土地不動産の取得をばかり、加工販売して行く路線に切り替えて、単なる管理業務の会社から、積極的に時代の趨勢に乗つていつたわけである。私が

知つているだけでも安孫子の住宅分譲販売、そしてマンションの分譲、木更津ゴルフ場の經營など沢山あつて、業績を伸ばしていくつた。

合理化の一環として横浜支社の土地を売つてくれと頼まれたことがあつた。義父の小島周次郎は先代から生糸仲買人・小島周次郎商店を經營し、横浜生糸取引所の理事長をしていた。また戦後は世の中の經濟環境の発展を見越し、児島証券を設立し、神奈川県証券業組合の理事長も務めていた。横浜財界人として著名でもあり、戦後の横浜經濟の復興に努めた立役者でもあつた。生糸取引所はその時、横浜シルクセンターに間借りして営業をしていたので、南仲通にあるその土地は格好のものだつた。資金も潤沢にあつたので購入した方がいいと、絶好のチャンスであり、理事長の業績として買っておくべきだと進言した。一時その気になつたものの、超堅実な性格で、何億と云う金をキャッシュで持つていながら買わなかつたのである。残念な

ことをした。それとも婿のことを、何か失敗でもしたら困ることでも心配していたのかもしれない。

日経不動産が福島の山にスキー場を作つて開会式があつたとき、荻原さんが誘つてくれたので、小生は車で飛ばして東京を発つていった。高速道路のない時だつたので国道四号線をひた走りして、開会式の前日、地元の土湯温泉に夜遅くついた。専務とは土湯温泉で落ち合つて一緒に泊まつた。私の着くのを心待ちにしていて、風呂にも案内してくださり、酒を飲まない荻原さんは、互いに地酒の酒を以て酒を酌み交わしたものである。翌日、萬さんとともに現地で会つてともに喜び祝つたことがある。遠い昔の話だが、懐かしい思いがする。

毛さんは根っからの甘党である。間々田の土地の取引を終えた時、針ヶ谷君の設営で小山市を流れる思い川を望んで立派で優雅な料亭があつた。お礼と祝杯の席であつた。毛さんを床

の間に、当時の小野田さんら五人が席についてもらつたが、芸者衆を呼んだ席に、酒でなく、大福餅を大皿に山と盛つて食らいついているには驚いてしまつた。しかし芸者衆には大もてであつた。料亭の座敷で一同が皆大福を食べて喜んでいる姿は、芸者衆にはなんと可愛く映つたことであろう。馬が好きだという小野田さんは、長身で体が大きく、性格しかも隣に綺麗どころをはべらして、一つではなく大福を三つも四つも口にほおばつて食べているのである。髓まで甘党で通してきた今までの人生なのだろう。これからも甘党で通していくに違いないと思つて、こうしたためでたい席には大福餅を三方に山と盛つてもてなすべきだと思つた。しかし赤坂で焼き鳥を「ちそうになつた時の荻原さんは、至極満悦の様子で、少し酒に飲まれたような氣もしたが、この店の焼き鳥は、軍鶏肉だから肉が締まつていて、水っぽくないと宣伝していたところを見ると、やはり辛党でなく根

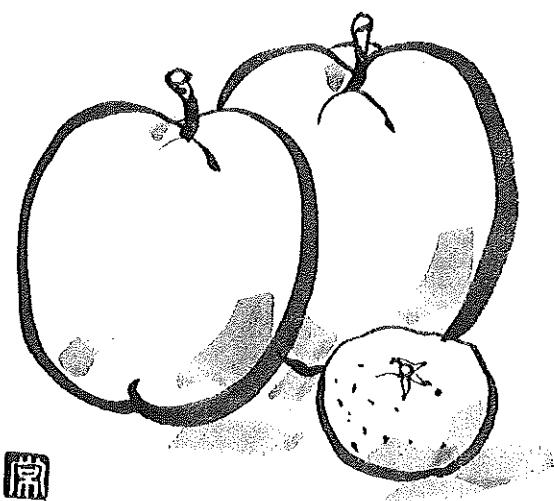
つからの甘党だと思つた。萬さんとは家族ぐるみの長い付き合いで、思い出すいろいろと話が出て来きてきりがない。そもそものはず、私も弟も、嫁さんをもらうときは、萬さんが仲人に立つて下さつたのである。

朝日、読売、毎日各新聞社にとつても同じことであるが、もともと日經不動産の主とした事業は、新聞社が保有する各支店、営業所の不動産を管理することであつた。専ら守勢に立つた事業である。それを積極的な姿勢に変えてくれたのは、「君、佐々木君のお蔭だよ」と、この若造を捕まえてそう言つて下さつたのである。萬さんのそうした評価は私にとつて比類なき励ましとなつた。独立して会社を立ち上げ、先刻話した友人の支援を得て、業務に参画して会社の基礎を打ち立てた。自己研さんに努め、信用を得て顧客第一に仕事に励み喜びにつないでいたことは確かである。その後こうして自分の事業を盤石なものとして築き上げて気分

を壮大に持てているのも、若い時の経験と勉學のお蔭である。そうした点で、思い出す人たちは数多くいることも身に余る幸福なことだと思つてゐる。世話になつた人々を忘れたことはない。過去を振り返るとき、仮に私に金銭上の被害をもたらした人たちにも、自分に落ち度があつたと反省してのちに生かせば、その人から得た教訓もあるわけである。当たり前なことがら、助け合いの精神、許し合いの精神が必要である。赦すということは、聖書の教えである。その根底は愛だともいう。お互に愛し合う精神があれば、世の中から不満対立もなくなるであろう。難しく深い学問研究の道もしかり、日常の平凡な事柄についても「真理は単純にして平凡である」の言葉は捨てがたい意味を持つてくれる。然り、さもありなんで、この言葉こそわが恩師のひとり、早稲田大学名譽教授で、経済学博士・堀江忠男先生の創造語であり、教えであり、以て先生ご自身の座右の銘でもあつた。

先生の教訓はいまだに眞実の書として、今もつて生かし続けてきている。わが昭和経済には、わが回想記として先生の論文が連綿として載せられている。掲載用に預かつたそれは研究書であると同時に、不朽の名作であり、心理の書として人間社会の本質を射抜いたものであると確信して、私は会員諸兄にこれをお届けしているのである。

荻原伯永氏の論文「恒産なくして恒心なし」の叙述を通して、経済社会に共通する基本的本質から思い出の人たちを振り返つていったが、世の中を性善説を以て臨むことがいかに寛容なことかを変わらぬこととして心に刻む結果になつた。次回に予定して掲げるのは、荻原伯永氏の懐かしい叙述文である。「無恒産 無恒心」を再読する機会を与えて下さつた縁を、感謝したい。



作品 関根常雄

表紙絵のことば

関根 常雄

陣屋

新宿駅から小田急線の快速特急小田原行

きに乗つて行くと、約一時間ほどで鶴巻温泉駅につきます。伊勢原をすぎると急に視界が開け、右に大山連山が見え、左に田園の広い風景が見られます。次の駅が鶴巻温泉駅です。こんど私夫婦が引っ越した先の転居地です。

秦野市は、たばこの葉の耕作が礎となつて発展しました。携わった先人たちの情熱を「火」にたとえ、今でも「秦野たばこ祭」が開催されています。山波と田園に包まれて静かな町です。

又、鶴巻温泉郷でも知られて居り、駅から2分たらずの処に、弘法の里湯と温泉を併設して、秦野市立宮永岳彦記念美術館があります。「光と影」の華麗なる宮永芸術で知られ

る洋画家の作品をご覧いただけます。入場無料です。プライベートな歓談を楽しみながら、入浴後の休息と話題にここを訪ねるのも良いでしょう。最適な空間で、ゆったりとくつろぐことができます。

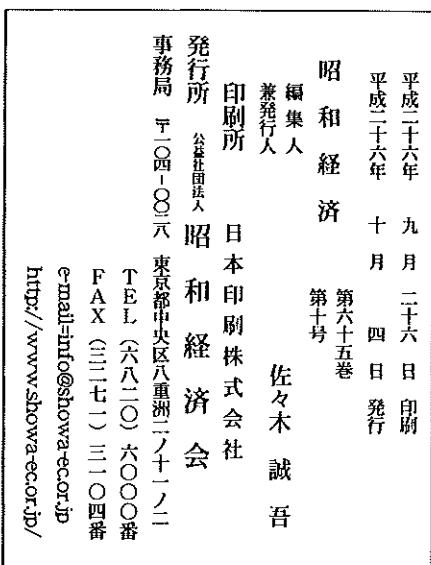
今回の表紙絵は陣屋です。神奈川県で「源泉」の許可を得た源泉第一号だそうです。丹沢を背に並ぶ陣屋館は、伝統と歴史の重みある純和風の建造物で、戦国の世を思わせる骨太いたたずまいと、雅な意匠と雰囲気が漂い、季節の息吹に満たされて、匠の思いもあって趣味深いものを感じます。お客様をお迎えして、又お送りする陣太鼓の「音陣屋」ならでは

公より拝領の鎧をはじめ、数々の武具刀剣類のコレクションが常設されて居ます。知られざる博物館の様な施設とも云えましょう。

勇ましい武士たちが鎌倉まで馬で半日、「いざ鎌倉」にそなえ、腕を磨き競つた和田義盛公の別邸跡に、当時の弓矢があります。

これにつかう矢竹がとれて、背後には丹沢山塊が望めます。その山を前に花水川が流れ、正に本拠地三浦半島からの出城としてふさわしい立地条件を持つた土地でもなつたようです。

この地で初めて印象づけられたのは、この「陣屋」でした。歴史の深みとは、この様な物を指して云うのでしょうか。私たち夫婦には、この土地の事について未だよく知らないのですが、住めば都と申します。これからもつともっと楽しい風景と機会に出会ふことを期待して居ります。



月刊誌掲載者・昭和経済論文（敬称略）	原田正二	大正大学教授
昭和五十三年（平成二十六年十二月）	豊田雅孝	当会顧問
大内義一 早稲田大学名誉教授（巻頭隨筆）	安井謙	第一勵業銀行産業調査部長
荻原伯永 （株）日本経済社 日経専務	庄田真也	宝生あやこ
牛場信彦 外務省顧問	山本幸助	通産省産業政策局長
広瀬嘉夫 N.H.K.解説委員	N.H.K.解説委員	産業資産課長
安井謙 参議院議長	慶應義塾大学教授	通産省商政策局国際経済部長
加藤寛 豊原兼一 N.H.K.解説委員	岡松壯三	通産省電子政策課長
斎藤栄三郎 参議院議員	村山祐太郎	鈴木金属工業副会長
岡村和夫 N.H.K.解説委員	堀江忠男	当会理事
石井義昌 糸川英夫 組織工学研究所所長	寺島祥五郎	早稲田大学名誉教授
宮本四郎 通産省産業政策局長	安井謙	当会顧問 自民党最高顧問
豊田雅孝 （社）日本中小企業団体連盟	田山晃	参議院議員
安井謙 前参議院議長 自民党顧問	鈴木三子郎	元読売新聞政治部次長
大来佐武郎 対外経済関係 政府代表	竹下登	元税務大学教官 税理士
藤原弘達 政治評論家	大蔵大臣	衆議院議員
堺谷太一 作家		

斎藤榮三郎	商学博士 法学博士 文学博士	水谷研治 東海総合研究所 理事長
参議院議員	バツラフ・ハベル チエコ大統領	河野洋平
衆議院議員	平野憲一郎 日本経済新聞 マニラ市局長	前川春雄
前 日本銀行総裁	吉田和男 京都大学教授	黒田眞
通商産業省 通商政策局長	堀江忠男	堀江忠男
大月短期大学学長	鈴木俊一	水谷研治
東海銀行常務取締役 調査部長	東京都知事	大月短期大学学長
米国企業公共政策研究所 所長	田村次朗	東海銀行常務取締役 調査部長
東京国際大学教授	目良浩一	米国企業公共政策研究所 所長
東京銀行会長	行天豊雄	東京国際大学教授
東京大学教授	吉川洋	東京銀行会長
慶應義塾大学教授	竹中平蔵	東京大学教授
慶應義塾大学教授	加藤寛	吉田和男
三和総合研究所 理事長	原田和明	京都大学教授
東京大学教授	鶴武彦	塩野谷祐一
東京国際大学教授	大山昊人	宮沢喜一
元 NHK解説委員	伊藤裕章	山田伸二
政府税制調査会会长	小宮隆太郎	石井明
東京大学名誉教授	青山学院大学教授	元 首相
元 NHK解説委員	元 NHK解説委員	NHK解説委員
東京大学教授	東京大学教授	東京大学教授
東京国際大学教授	東京大学教授	千葉商科大学長
元 NHK解説委員	政府税制調査会会长	加藤寛
東京大学名誉教授	朝日新聞ワシントン特派員	原田和明
青山学院大学教授	伊藤裕章	鶴武彦
元 NHK解説委員	大山昊人	大山昊人
企业コンサルタント	元 NHK解説委員	元 NHK解説委員
井浦康之	元 NHK解説委員	元 NHK解説委員

島田晴雄	慶應義塾大学教授	ランコ岩本 ランコ・インターナショナル代表
樋口廣太郎	アサヒビール会長	ジエームス・D・ウォルフエルソン
奥野正寛	橋本大二郎 東京大学教授	世界銀行総裁
橋本大二郎	高知県知事	山口光恒 慶應義塾大学教授
福川伸次	電通総研研究所所長	シモン・ペレス イスラエル外相
鈴村興太郎	一橋大学経済研究所教授	岡崎久彦 元駐米公使 駐タイ公使
清水啓典	一橋大学教授	ボール・サミュエルソン 経済学者
高橋伸彰	立命館大学教授	大野健一 政策研究大学院大学教授
中谷巖	一橋大学教授	佐々木和男 サウディ石油化学㈱社長
金大中	韓国大統領	ドナルド・ラムズフェルド 米国防長官
佐和隆光	京都大学教授	イアン・ジョンソン 世界銀行副総裁
茅陽一	慶應義塾大学院教授	竹森俊平 慶應義塾大学教授
吉田和男	京都大学教授	朱建榮 経済評論家
榎佳之	東京大学 医科学研究所 大学院教授	アレクサンドル・パノフ 駐日ロシア大使
高橋伸彰	立命館大学教授	林光夫 ナショナル日系博物館ヘリテージセンター 理事 (前 理事長) 日系プレース基金理事
月尾嘉男	東京大学教授	ハワード・H・ベーカー 駐日米大使
北岡伸一	東京大学教授	山本清治 経済評論家
石原慎太郎	東京都知事	

スティーブン・ゴマソール 駐日英國大使	佐藤隆三	ニューヨーク大学名誉教授
山口義二 立教大学経済学部教授	曾根泰教	慶應義塾大学教授
公文俊平 多摩大学情報社会学研究所所長	平野雅章	早稲田大学教授
伊藤元重 東京大学教授	若田部昌澄	東京大学教授
アルビン&ハイディ・トフラー 米未来社会学者	山内昌之	東京大学客員教授
中曾根康弘 元首相	大西隆	慶應義塾大学教授
ハワード・H・ベーカー 前駐日米大使	浜田純一	東京大学教授
竹森俊平 慶應義塾大学教授	中西寛	京都大学教授
岡部直明 日本経済新聞論説主幹	高木新二郎	前産業再生機構委員長
加藤寛 千葉商科大学学長	諸富徹	京都大学准大学教授
山口光恒 帝京大学教授	入江昭	ハーバード大学名誉教授
斎藤惇 産業再生機構前社長	林良造	東京大学教授
渡辺智之 一橋大学教授	クリスティーナ・アーディヤン	一橋大学教授
土屋堅二 お茶の水女子大学教授(哲学)	伊藤元重	東京大学教授
山崎正和 中央教育審議会会長	前ナザレン神学大学学長	名譽シニアフェロー
福江等 井深記念塾ユーライ	今井賢一	スタンフォード大学
大田弘子 経済財政担当相		

吉川弘之	東京大学 元学長	深尾京司	一橋大学教授
池尾和人	慶應義塾大学教授	山本 純	慶應義塾大学准教授
細田衛士	慶應義塾大学教授	小黒 一正	一橋大学准教授
林 良嗣	名古屋大学教授	吉川弘之	東京大学 元学長
土居丈朗	慶應義塾大学教授	大村敬一	早稻田大学教授
脇坂 明	学習院大学教授	庄司克宏	慶應義塾大学教授
閔 满博	一橋大学教授	ジム・フレアティ	カナダ財務相
古谷 浩一	朝日新聞記者	伊藤元重	東京大学教授
御厨 貴	東京大学教授	清家 篤	日本私立大学連盟会長
田中明彦	東京大学教授	藤原帰一	慶應義塾長
西垣 通	東京大学大学院情報学環教授	緒方貞子	国際協力機構（JICA）理事長
山内昌之	東京大学教授	田中素香	中央大学教授
高安秀樹	明治大学客員教授	申 玲秀	駐日韓国大使
浜田宏一	エール大学教授	加藤弘之	神戸大学教授
若宮啓文	朝日新聞本社主筆	新宅純一郎	東京大学准教授
植田和弘	京都大学教授	岡部直明	日本経済新聞客員コラムニスト
松本 紘	京都大学総長	若宮啓文	朝日新聞主筆
大西 隆	東京大学教授	中沢克二	日本経済新聞社 中国総局長
山中季広	朝日新聞ニューヨーク支局長		

猪木武徳	青山学院大学特任教授	有田哲文	朝日新聞編集委員
長山浩章	京都大学教授	柴田直治	朝日新聞国際報道部
石川城太	一橋大学教授	竹森俊平	慶應大学教授
鹿野嘉昭	同志社大学教授	磯田道史	静岡文化芸術大学准教授
岡部直明	日本経済新聞客員コラムニスト	橘川武郎	一橋大学教授
篠崎彰彦	九州大学教授	元重伊藤	東京大学教授
翟林瑜	大阪市立大学教授	山内昌之	明治大学特任教授
横山彰	中央大学教授	白石隆	政策研究大学院学長
小林慶一郎	一橋大学教授	土屋英夫	日本経済新聞本社コラムニスト
原真人	朝日新聞編集委員	戸田悦造	懸賞論文 優秀賞
若宮啓文	朝日新聞本社主筆	青山慶二	早稲田大学教授
小林慶一郎	帝京平成大学教授	瀬口清之	キヤノングローバル戦略研究所研究主幹
須藤繁	一橋大学教授	今井賢一	スタンフォード大学名誉シニアファロー
翁邦雄	京都大学教授	田中伸男	日本エネルギー経済研究所特別顧問
下斗米伸夫	法政大学教授	宮本雄二	宮本アジア研究所代表、外務省顧問
吉川洋	東京大学教授	菅原宅	東京大学先端科学技術研センター准教授
渡辺博史	国際協力銀行副総裁・元財務官	白石隆	政策研究大学院学長
澤田康幸	東京大学教授	野中郁次郎	一橋大学名誉教授
北岡伸一	国際大学学長	矢作弘	龍谷大学教授

有吉 章	一橋大学教授	加藤 寛	慶應義塾大学教授
御厨 貴	東京大学先端技術研究センター教授	糸川広洋	組織工学研究所 所長
伊藤 邦雄	一橋大学教授	大来佐武郎	対外経済担当大臣
大村 敬一	早稲田大学教授	齊藤栄三郎	科学技術省長官
御厨 貴	放送大学教授	柿沢弘治	衆議院議員
山内 昌之	明治大学特任教授	浜田幸一	衆議院議員
北岡 伸一	国際大学学長	木元教子	評論家
葛西 敬之	JR東海名誉会長	岡松壯三郎	通産省電子政策課長
岡崎 哲二	東京大学大学院経済学研究科教授	稻川泰弘	通産産業省政策局
山内 昌之	明治大学特任教授		商務サービス産業室長
池上 彰	東京工業大学	藤原弘達	政治評論家
山崎 朗	中央大学大学院経済学研究科教授	山本幸助	通産省産業政策局長
橋本 和仁	東京大学教授	岡松壮三郎	通産省生活産業局長
石川 健治	東京大学教授	山田勝之	通産省国際政治部長
		鈴木幸夫	テレビ東京解説委員長
		山室英男	NHK解説委員長
		佐野忠克	通産省宇宙産業室長
		河野洋平	衆議院議員
		寺島祥五郎	当会理事
栗栖弘臣	統合幕寮長		
堺屋太一	作家		
当会・講演会 講師（敬称略）			
昭和五十三年（平成二十六年十月）			

長富祐一郎	大蔵省官房審議官	大山昊人	NHK解説委員
中沢忠義	中小企業庁長官	齊藤栄三郎	國務大臣 科學技術厅長官
吉國隆	農林水産省大臣官房企画室長	内田 満	早稲田大学教授
天谷直弘	(財)産業研究所顧問	岡松壯三郎	通商産業省生活産業局長
鈴木俊一	元 通産省審議官	水谷研治	東海銀行常務取締役調査部長
黒田眞	東京都知事	有馬朗人	東京大学総長
上野明	通商産業省 通商政策局長	松本和男	経済評論家
前川春雄	野村総合研究所 主任研究員	大山昊人	NHK解説委員
大山昊人	前日本銀行総裁	鈴木淑夫	野村総合研究所副理事長
野坂昭如	作家	松永信雄	元 日本銀行理事
水野哲	通産省産業政策局	霍見芳浩	外務省顧問 前 駐米大使
堀江忠男	産業政策局総務課長	村松暎	ニューヨーク市立大学大学院教
梅沢節男	早稲田大学名譽教授	慶應義塾大学名譽教授	杏林大学教授
田川誠一	国税庁長官	飯田健一	NHK解説委員
森 亘	進歩党代表 衆議院議員	L・A・チジヨーフ	駐日ロシア連邦大使
藤井康男	東京大学総長	大山昊人	元NHK解説委員
水城武彦	龍角散社長	小浜維人	NHK解説委員長
			東京国際大学教授

青木匡光 紺谷典子	メディエーター（人間接着業） (財)日本証券経済研究所	大山晃人 山田伸二	東京国際大学教授 NHK解説委員
原田和明 和田俊	三和総合研究所 朝日新聞編集委員	吉田春樹 副島隆彦	和光経済研究所理事長 経済評論家
大山晃人 木村時夫	テレビ朝日ニュース・ステーション 早稲田大学名譽教授	早坂茂三 山田伸二	ポールシエアードベアリング投信投資顧問 (株)日本株運用ヘッド兼ストラジスト
木浦康之 元 N H K 解説委員	井浦コミニケーションセンター 当会理事	中村敦夫 原田和明	田中角栄 元秘書 参議院議員
水谷研治 目良浩一	東海総合研究所 理事長 東京国際大学教授	西澤宏繁 山田伸二	三和総合研究所特別顧問 東京都民銀行頭取
山下亀次郎 筑波大学附属病院副院長	筑波大学臨床医学系内科教授 立教大学教授	亀井静香 山田伸二	衆議院議員 N H K 解説委員
斎藤精一郎 岩國哲人	武者陵司 川崎真一郎	武者陵司 川崎真一郎	ドイチエ証券チーフストラジット 第一生命経済研究所 主任研究員
浅井隆 岩田規久男	前 出雲市長	金子一義 山口義行	国務大臣 立教大学教授
久保亘 前 大蔵大臣	経済ジャーナリスト 上智大学教授	山田伸二 N H K 解説主幹	千葉商科大学教授

伊藤 達也	元 金融担当大臣	経済評論家・エコノミスト
高木新二郎	㈱産業再生機構 産業再生委員長	月尾 嘉男 東京大学名誉教授
齊藤精一郎	千葉商科大学 大学院教授	山田 伸二 NHK解説主幹
佐々木和男	㈱NTTデータ 経営研究所所長	山内 進 一橋大学学長
三原 淳	社会経済学者 エコノミスト	板垣 信幸 NHK解説主幹
石川 一洋	学校法人静岡理工科大学 理事長	熊野 英生 第一生命経済研究所首席エコノミスト
山田 伸二	元 三菱商事(㈱)本部長	
中谷 元	サウディ石油化学(㈱)前社長	
林良 造	経済評論家 株式評論家	
渡辺 喜美	NHK解説委員	
山崎 淑行	元 モスクワ支局長	
中谷 嶽	NHK解説主幹	
林良 造	元 防衛厅長官 衆議院議員	
東京大学教授	元 NHK解説主幹	
元 経済産業省 経済産業政策局長		
みんなの党代表 衆議院議員		
渡辺 喜美		
山崎 淑行		
中谷 嶽		
ロバート・フェルドマン		



三社祭

佐々木 誠吾

風かほる皐月に三社祭り来てはなやき過ぎぬふるさとの街

夏を告ぐ三社祭りに若衆のみこしを担ぐ力まされり

とび職と思へる人の花棒を粹にかつぎて足をふむよし

六区より五重の塔の脇にたつスカイツリーの空に伸ぶ見ゆ

澄みわたる皐月の空に浅草の祭りの幟立ちて夏来ぬ

お神輿を祓ひひ清めておごそかにみ靈をおさめ担ぎ行くなり

あさくさの三社祭の人波に我ももまれて良きやふるさと

講演会の主な講師（講演時役職）（敬称略）

山黒岡山山長梅鈴前牛野中岡加堺天河高糸小藤大安斎土本稻吉井岩福
 室田松本田富沢木川場坂沢村藤屋谷野木川汀原平井藤屋田葉野深佐田
 莊祐新榮宗
 英三幸勝一節俊春信昭忠和太直洋二英利弘正三一秀俊凱越
 男真郎助久郎男一雄彦如義夫寛一弘平郎夫得達芳謙郎清郎三彦大実夫
 N通通通大国東日外作中N慶作通科弁組日政大參科經本經日ソ富
 藏
 H産産産藏本H應學織本學田本士大
 K省省省税京務企K義產工經治議濟濟二臣
 生產國官銀墊學濟藏技銀（内
 解產業際府都省業解大省術護研新評院術評評一閣
 説業產政政房行序說序究聞大序研行行總
 委審業策治審長知顧所社論議論論社理頭大
 員議局局部議長委教長所顧長
 長官長長官官事裁問家官員授家間官士長問家臣長官家長家事長取

伊金山龜西早島副山久岩斎目原和小霍松鈴有大水森堀水藤井大
 通財藤子口井澤坂田島田保国藤良田田浜見永木馬來谷江城井浦山
 省精佐
 担當達一義靜宏茂晴隆仲哲一浩和維ヨ芳信淑朗武研忠武康康昊
 宮也義二香繁三雄彦二亘人郎一明俊人浩雄夫人郎治亘男彦雄之人
 通大内国立衆東政慶政N前出立東三テN駐ニ前野東對東東早N龍井N
 商藏務教京應H京和ビHユ駐村外海稻HコH
 産省閣大議都治義治大教京綜朝日ヨ米總京田角ミュ
 業政總臣大議都治義治大國合ニKロク大合經合Kニケ
 省策理產經民塾大際研ユ解シ立・大研大濟研
 研究再濟銀大院評評解藏大外究學担究學解散ト解
 研究會臣生學說市學大究・說大外究學担究學名説
 会メ補機部議行論學論大教理ア學務所當譽社
 ンバ佐構頭教委教事シヨ員大院顧事大事教
 ババ担教頭教委教事シヨ員大院顧事大事教
 ！！官當授員取家授家員臣長授授長ン長使授間長長臣長長授員長！員

昭和經濟 26—9・10月号

昭和25年6月24日 第3種郵便物認可（毎月1回1頁発行）
昭和25年10月19日 日本国鉄道特別批准認証誌第1797号

Showa Economic Study Association
企業家・経営者団体

公益社団法人 **昭 和 経 済 会**

事務局 〒104-0028 東京都中央区八重洲2-11-2

TEL 6820-6000・3271-8846 FAX 3271-3104

URL <http://www.showa-ec.or.jp/>

e-mail info@showa-ec.or.jp